

42489

教科書文庫

4
810
44-1933
200030
2095

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

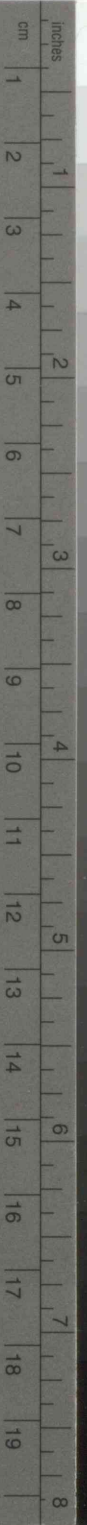


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

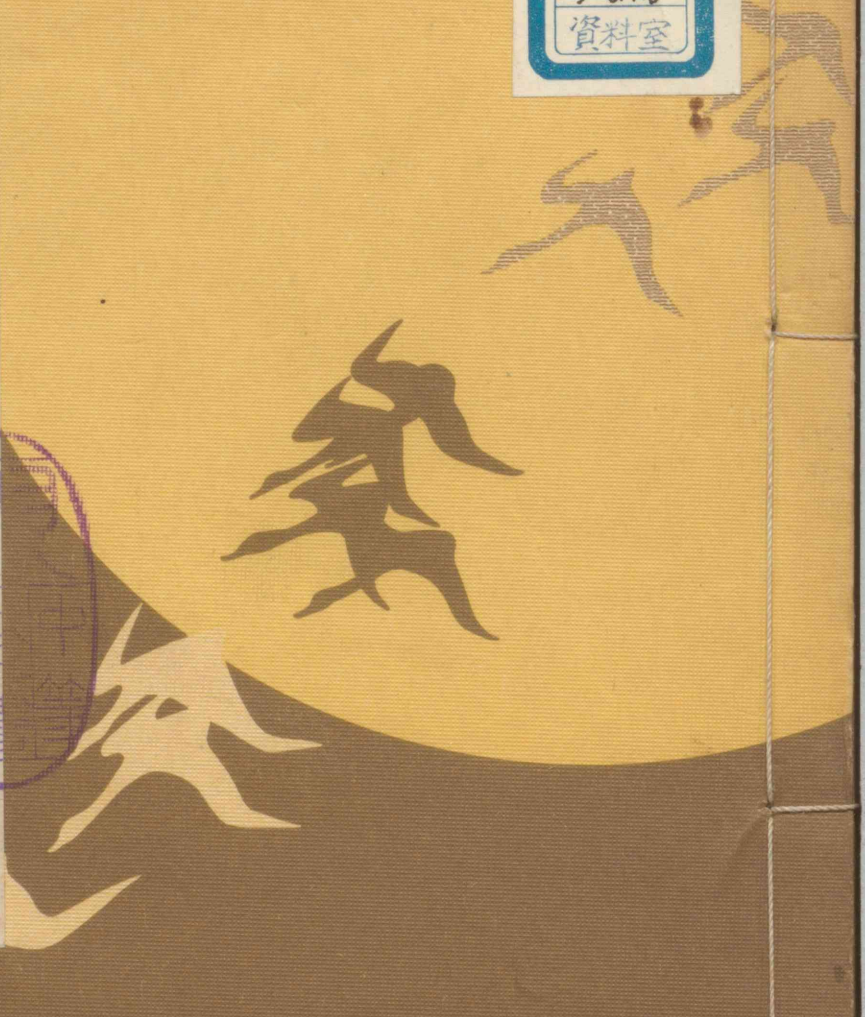
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Fuld
資料室

帝國新國文
卷七



文部省檢定
昭和八年八月十四日
實業學校國語科

資料室

3759
Fu10

東京帝國大學教授
文學博士 藤村作編

帝國

新國文

卷七



株式會社
帝國書院



(第一八課参照)

(筆一惠田福)

盛 重 平



帝國新國文 卷七

目次

- 一 昭和日本の目標
- 二 草枕
- 三 梅が香
- 四 獨創の國「日本」
- 五 中宮寺の觀音
- 六 晩春の別離
- 七 花のさだめ
- 八 朝飯
- 九 築山先生に上る書
- 一〇 西郷と大久保
- 一一 西郷南洲

藤村	山本	頼山	島崎	本居	島崎	和辻	平福	夏目	藤村
作	有	陽	藤	宣	藤	哲	百	漱	作
七三	六〇	五三	四五	四二	三六	三〇	二四	二一	一

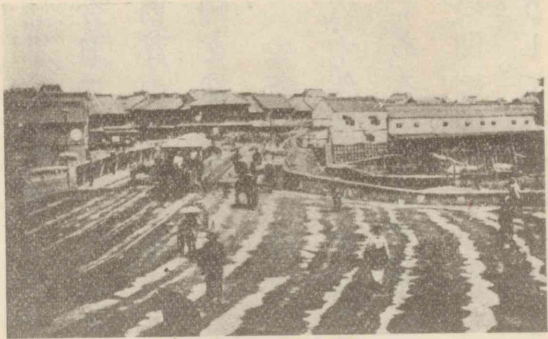
二二	松島と象瀉	松尾芭蕉	七五
二三	詩人芭蕉	藤岡東圃	七九
二四	芳流閣	瀧澤馬琴	八三
二五	馬琴の心境	芥川龍之介	八九
二六	夏の夜		一〇〇
二七	廣重と東海道風景	小島烏水	一〇四
二八	小松内府	平家物語	一一一
二九	塔影	河井醉茗	一二二
三〇	ベートーヴェンの一生	中澤臨川	一二六
三一	小草の花	綱島梁川	一三六
三二	百蟲譜	横井也	一三九
三三	月雪花の美觀	芳賀矢一	一四四
三四	高瀬船	森鷗外	一五二

一 昭和日本の目標

藤村作

明治維新後の先輩の先見と努力は今日の新日本を建設した。今日の新日本といふのは、在來の東洋の文化の上に立つた日本に、西洋の文化を輸入し、在來の東洋精神の上に立つた日本に、西洋精神を採り入れて出來たものである。明治・大正の六十年間は、全くこの新日本の建設の爲に存したといつてもよからう。實際この六十年間は西洋文化・西洋精神の模倣・輸入・理解・消化に費されたのである。この方針は決して誤つたものではなかつた。而してこの間に於ける先輩の努力は決して少ないものではなかつた。さうして僅かに六十年の間に、西洋諸國が多くの年月を費して成就し得たものを學び取り、輸入し盡くすに至つたのである。物質文化・科學文化の點では、本家の西洋諸國にも、今日では最早多く遜色

を見ないままに進んだのである。それであるから、明治・大正時代を概観するならば、西洋文化の輸入・模倣の時代といつても決して



明治初年の本橋

過謬ではないと思ふ。明治天皇の維新の始の五箇條の御誓文にも明かに知識を世界に求むることを仰せになつてゐるやうに、明治・大正の國民は皆一齊に西洋文化の輸入・西洋精神の模倣を以てその生活の信条として來た。國民全體がこれを共同の目標として、進行を共にしたればこそ、明治・大正時代の大成功は來たのである。

然るにここに御代は變つて昭和となつた。昭和の日本もやはり依然として明治・大正の日本で可なりであらうか。昭和の國是は、明治・大正の國是でよいのであらうか。

私の見る所では、世界に國を成すものは、皆他の長所を探ることを一日たりとも怠つてはならない。殊に後れて西洋文化を學び得



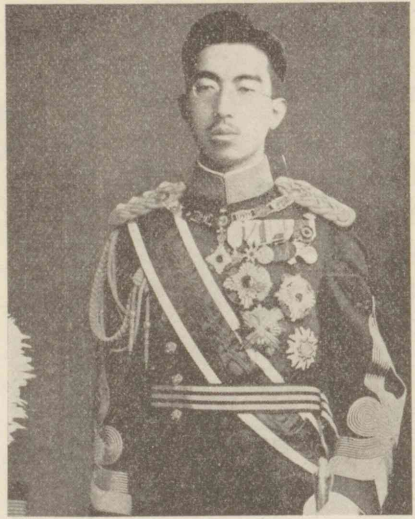
昭和時代の本橋

た我々新日本國民は、將來といへども決して西洋文化の輸入・模倣を忽にしてはならないが、併し最早その輸入・模倣を以て第一目標とすべき時代は過ぎ去つた。我々昭和の國民はここに新たなる共同の目標を選定すべき立場に在ると思ふ。國民が共同の理想を掲げ、共同の目標に向つて進んでゐる時代は、眞にその國運隆盛の時代である。若し國民がこの共同の理想・目標を失うた時は、國家は最も困難の時代にあることを覺悟せねばならない。

思ふに我が昭和の今日は、最早明治大正時代の理想目標を以て満足し得なくなつたのである。西洋の摸倣のみでは満足しきれなくなつたのである。故に一國の政治を握るものは、この點に心を致して、ここに共同の理想の光を掲げ、共同の目標をはつきりと認めさせることを先づ以て、今上陛下の御代の初に努めなければならぬと思ふ。これが爲には御大禮は又と得難い好機會であつた。昭代一遇の好機會であつたのである。かういふよい機會を捕へなければ、これを八千萬國民の靈にはつきりと深く彫り附けることは困難である。一遇の好機會を逸し去つたのは残念の事をしたものである。

然らば昭和時代の新國是といふべき、昭和國民の進路に見つむべき共同の目標といふのは何であらう。是を求めることは決して困難の事ではない。又骨折つて探出すべきものならば、それは

容易に國民共同の目標となり得べきものではない。私の見る所では、この目標は決してこれを骨折つて探すまでもなく、極めて平凡なものとして手近い所に在る。否、平凡なればこそ、當然として



今上陛下

國民誰しもに承認され、又手近に在ればこそ、誰が見出したといふこともなく、誰しもが共鳴し得るのである。その目標といふのは、既に今上陛下が朝見式後の勅語の中に仰せられてある「摸擬を戒め創造を勗める」ことである。そして余はこれこそは、我々昭和國民が、性の如何に拘らず、職務の如何を問はず、悉くこれを體して進むべき目標であり、理想であると思ふ。

即ち、政治・經濟・交通・産業・學術・教育その他萬般の生活の上で、最早西洋の模倣ばかりすることを戒めて、日本民族の獨創を以て日本文化を創造することに勗めることを、八千萬國民の共同の目標として、一致して進むことを最も必要とするのである。

併し我々日本人の獨創の文化を創造するといつても、もとより既に世に存するものを基礎として、その上に建設するより外に行くべき途はあるまい。全くないものから造り出すことは到底出來ないことである。既に在る文化の上に新しいものを築くことならば、それは我々の努力に依つて固より成し得べきである。詳しくいへば、世界に存する二大文化は、東洋文化と西洋文化で、その外にはないのであるから、この二大文化の基礎の上に日本文化を建設する外、道はないと思ふのである。

さて我々は既に千餘年の歲月を経て東洋文化を消化して來、そ

の粹を集めて所有してあるものである。そして又同時に最近六十餘年の努力で西洋文化をも理解して世界のあらゆる有色人種の中で、最もよく西洋文化を知る所の國民となつたのである。かくして我々は、世界の二大文化を融合・調和し、統一するに最も有利な立場に在るものである。

翻つて我が國民性を顧み、我々の祖先が支那・印度の文化を輸入模倣しつゝ、進んで來た跡を見ると、彼等は決して他人の模倣に止り、輸入に満足してゐない。輸入し模倣したものの上に日本人の息をかけて、他國の文化を改造し、これを我の有にしてしまつてゐる。儒教・佛教の如きにしても、日本の儒教、日本の佛教と化してゐる。この歴史的事實に徴して、將來を考ふれば、我々は東西二大文化を融合・調和し、統一して、その上に日本特殊な文化を建設することを成し遂げ得ない國民ではないと思ふ。我々が模倣を戒め創

造を助めて、東西二大文化の融合調和より進んで、日本文化の創造を共同の目標とせよといふのも、決して愚かな強がり、誇大妄想の類ではない。爲政家の探つて以て國是とすべきものであり、國民教育家の教育の理想目標とすべきものであると信ずる。

二草枕

夏目漱石



夏目漱石
名は金之助
東京の人
文學者
大正五年歿（年
五十）

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い處へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれて、畫が出来る。

人の世を作つたものは神でもなければ、鬼でもない。矢張向三軒兩隣にちら／＼する只の人である。只の人が作つた人の世が

住みにくいからとて越す國はあるまい。あれば人てなしの國へ行くばかりだ。人てなしの國は、人の世よりも猶住みにくからう。越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處を、どれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人といふ天職が出来て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊かにする故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩を引抜いて、有難い世界をまのあたり寫すのが詩である。畫である。或は音樂と彫刻とである。こまかに云へば、寫さないでもよい、只まのあたり見れば、そこに詩も生き、歌も涌く。着想を紙に落さずとも、璆鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の

俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。

このゆゑに、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱する點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し



夏目漱石詩畫

得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩する點に於て、千金の子よりも萬乗の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十年にして、明暗は表裏の如く、月のある所にはきつと影がさすと

悟つた。三十の今日は、かう思うて居る。喜の深きとき、憂愈、深く、
樂しみの大きなほど、苦しみも大きい。之を切放さうとすると、身
が持てぬ。片付けようとすれば、世が立たぬ。金は大事だ。大事
なものが殖えれば、寝る間も心配だらう。閣僚の肩は數百萬人の
足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。旨い物
も食はねば惜しい。少し食へば飽きたらぬ、存分食へば後が不愉
快だ。余の考がこゝまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐り
のわるい角石の端を踏損つた。平衡を保つ爲に、すはやと前に出
した左足が、仕損じの埋合せをすると共に、余の腰は工合よく方三
尺程な岩の上におりた。肩にかけた繪具箱が腋の下から躍りだ
しただけで幸に何の事もなかつた。

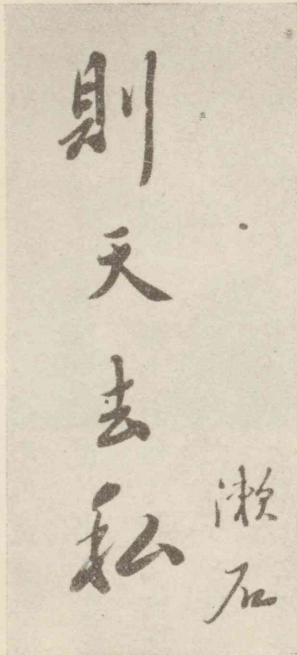
立上る時に、向ふを見ると、路から左の方に、バケツを伏せたやう
な峯が聳えて居る。杉か檜か分らないが、根元から頂まで悉く蒼

黒い中に山櫻が薄赤く、だんだんにたなびいて、續きめが確と見えぬ位、靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきこんで眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへはつきりしてゐる。行く手は二町程で切れてゐるが、高い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平かにしても、石は平かにならぬ。石は切碎いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を讓る景色はない。向ふで聞かぬ上は、乗越すか、廻るかしなければならぬ。岩のない處でさへ、歩きよくはない。左右が高く、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、その頂點が眞中を

貫いてゐると評してもよい。路を行くと謂ふよりは、川底を涉ると謂ふ方が適當だ。固より急ぐ旅ではないから、ぶら〜と七曲へかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴



いてゐるのか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が

一面に蚤に刺されて、居たゝまれない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬間の餘裕もない。長閑な春の日を鳴盡くし、鳴明かし、又鳴暮さなければ、氣が濟まぬと見える。その上何處迄も登つて行く、何時迄も登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違な

い。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに、形は消えてなくなつて、只、聲だけが空の裡に残るのかも知れない。岩角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛揚つて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と揚る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思つた。最後、最後に、落ちる時も、揚る時も、また十文字に擦違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を取ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いたときに、魂のありかゞ判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものうちであ

シェレ
英國の詩人
(西紀五三二—五三三)

れ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。忽ちシェレの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で、覺えた所だけ誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。その二三句のなかに、こんなのがある。



Shelley

—レエシ

前を見ては、後を見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。美しき極みの歌に、悲しさの極

みの思籠るとは知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩

人だから萬斛で、素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。それならば、詩人になるのも考へものだ。

暫くは路が平らで、右は雑木山、左は菜の花の見續けである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へ伸して、真中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣をとられて踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと振りむいて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎮座して居る。暢氣なものだ。又考を續ける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦しみもない。菜の花を見ても、只嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も―櫻はいつか見えなくなつた。

かう山の中へ来て、自然の景物に接すれば、見るもの、聞くもの、面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

しかし、苦しみが無いのは、何故だらう。只この景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只この景色が―腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬこの景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力は、こゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、泣いたり、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを仕通して飽きくした。飽きくした上に、芝居

や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少なからう。どこまでも世間を出ることが出来ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、この境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駆けあるいて錢の勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも、無理ではない。

嬉しい事に、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

採菊東籬下、悠然見南山。

採菊東籬下
晉の陶淵明の句

只それぎりの裏に、暑苦しい世の中を、まるで忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣の人が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と、出世間的に、利害得失の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。深林人不知、明月來相照。

獨坐幽篁裏
王維(唐詩選)

只二十字のうち、優に別乾坤を建立して居る。この乾坤の功德は、不如歸や、金色夜叉の功德ではない。汽車、汽船、權利、義務、道德、禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却して、ぐつぐつと寝込むやうな功德である。

二十世紀に睡眠が必要なならば、二十世紀にこの出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も、詩を読む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざわざ、暢氣な扁舟を浮べてこの桃源に溯るものはないやうだ。余は固より詩人を職業にして居

不如歸
徳富蘆花の作
金色夜叉
尾崎紅葉の作

王維 唐の詩人
 淵明 名は潜 晉の詩人
 ファウスト ドイツの詩人ゲ
 ーテの作
 ハムレット 英國の劇作家シ
 エクスピアの作



陶淵明 (土佐光起筆)

らぬから、王維や淵明の境界を今の世に布教して廣げようと云ふ
 心掛も何もない。只自分には、かういふ感興が、演藝會よりも、舞踏
 會よりも、楽しみになるやうに思はれる。ファウストよりも、ハム
 レットよりも、有難く考へられる。かうやつて、只一人、繪具箱と三
 脚几をかついで、春の山路をの
 そのそ歩くのも、まつたくこれ
 が爲である。淵明、王維の詩境
 を直接に自然から吸収して、す
 こしの間でも、非人情の天地に
 逍遙したいからの願。一つの
 醉興だ。
 勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く續
 く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中、南山を見詰めて居たので

もあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寝た男で
 もなからう。矢張餘つた菊は花屋へ賣つて、生えた筍は八百屋へ
 拂ひ下げたものと思ふ。かういふ余もその通り、いくら雲雀と菜
 の花が氣に入つたつて、山の中へ野宿する程、非人情が募つては居
 らぬ。
 こんな處でも人間に逢ふ。ぢん／＼端折りの頬被りや、赤い襪
 の姉さんや、時には人間より顔の長い馬にまで逢ふ。百萬本の檜
 に取圍まれて、海面を抜く何百尺の空氣を吞んだり吐いたりして
 も、人の臭みはなか／＼取れない。それどころか山を越えて落ち
 つく先の今宵の宿は、那古井の溫泉場だ。

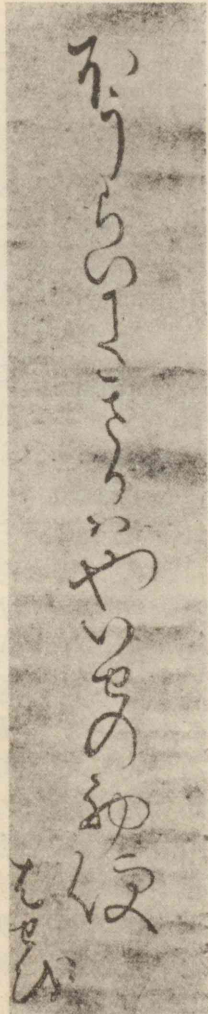
三 梅が香

— 草 枕 —

芭蕉 松尾氏
 伊賀の人
 元祿時代の俳聖
 元祿七年歿(年
 五十一)

芭蕉

梅が香にのつと日の出る山路かな
古池や蛙飛び込む水の音
花の雲鐘は上野か浅草か
草の葉を落つるより飛ぶ螢かな



芭蕉筆蹟

筆蹟

ほうらいにきか
ばやしせの初便
はせを

燕村

谷口氏、後與謝
と改む
俳人
天明三年歿(年
六十八)

荒海や佐渡に横たふ天の川
名月や池をめぐりて夜もすがら
旅人と我名呼ばれむ初時雨
さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

燕村

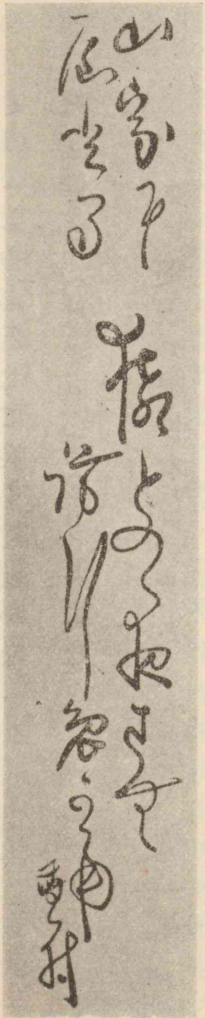
筆蹟

山家に屋どる
猿どの、夜さむ
訪行兔かな
燕村

一茶

小林氏
信濃の人
俳人
文政十年歿(年
六十五)

花に暮れて我が家遠き野道かな
富士一つ埋み残して若葉かな
さみだれや大河を前に家二軒



燕村筆蹟

名月や夜は人住まぬ峯の茶屋
蕭條として石に日の入る枯野かな
大雪となりけり關のとざし時

鳴く猫に赤ン目をして手毬かな
痩せ蛙負けるな一茶これにあり

一茶

蟻の道雲の峰よりつゞきけり
やれ打つな蠅が手を摺る足を摺る

筆蹟

刈萱堂一茶
花の世は佛の身
さへおや子哉

刈萱堂 一茶
花の世は佛の身
さへおや子哉

一茶筆蹟

きり、しやんとして咲く桔梗かな
寒念佛さては貴殿でありしよな

四 獨創の國「日本」

平 福 百 穂



平福百穂
名は貞藏
秋田縣の人
畫家

ヨーロッパを一廻りして來て、つくづく日本に生まれたことを仕合せに思つた。それは、非常に豊富に自然に恵まれてゐることだ。無論歐洲の自然には、日本の自然には無いところの大陸味

はある。けれども、四季の移りかはりをはじめ、日本ほど自然から享けてゐるものゝ豊富な國は、世界に又とあるまい。樹木、草花、果實に至るまで、その種類の多いことは、謂はゞ熱帯から寒帯に至るまでのものが揃つてゐるのだ。山や川や海にしても、島國の常として規模の雄大と云ふ點になれば、歐洲大陸に劣るが、温容あつて麗しく、しつとりと濕ひのあることは、これ又世界に冠たるものである。従つて古來、我が國民は自然に抱擁され、自然に親しみつゝ生活して來てゐるのであつて、それは我々の風俗や習慣を一目すれば明かである。

これに反して西洋のものは、總てが自然との交渉が薄く、氣韻や餘裕などを尊重するよりも、理詰で納得出来る方を選び、極めて人事的方面に發達して來てゐる。自分の専門の繪の方から見ても、西洋では、古い繪と云へば、十四世紀頃からのものが残つてゐるが、

それ等は殆ど皆、宗教や神話に關するもの、つまり宗教畫が先づその全部を占め、風景畫や靜物畫などは、近世になつてやうやく發達したのである。それまでの繪は、總て人事的で、東洋の繪のやうに、



(筆穂百福平) 月 春

古くから景色や花鳥や獸類などの自然を取扱つたものは、殆ど無いと云つていゝのである。

併し風景畫や靜物畫が發達したと云つても、その取扱ひ方も矢張り西洋流で、東洋に於けるやうに、動物でも鳥でも花でも、自然を樂しむ、つまり鳥や動物等と同化して取扱つてゐると云ふ風なのは、無いと斷言出來ないまでも極く稀である。例へば鳥を描くに

しても、鐵砲で打殺したのを、吊下げて置いたり、デスクの上に他の靜物と一緒に置いたりして取扱つてゐる。花にしてもさうだ。われわれ東洋人は、雨に傾いてゐるとか、露を含んでゐると云ふ風に、詩情を以て取扱つてゐるが、西洋人は、たゞ色の材料として取扱つてゐるに過ぎない。詩と、現實と、諸君は果して何れを取られるぞ。

歐洲の、往來を歩いてゐる婦人を見ても、或は流行品を飾りたててゐる百貨店などの飾窓を見ても、美を競ひ粹を争つてゐる筈の婦人用の着物が模様にしる、色彩にしる餘りに單調で貧弱なことは意外の感に打たれる。小さな持物や工藝品にしても、非常に單調で變化に乏しいのだ。誰も眼につくやうな極めて複雑な模様のもものも有るには有るが、模様として大して價值あるものとは思へない。

然るに、一度日本の地を踏んで、往來の婦人の帯なり着物なりを見ると、その色彩と模様之餘りに多種多様なことは、他の國々とても比較が出来ない。それと云ふのも周圍の自然が、樹木の種類、四季に咲く花、山川海等、往來を歩いても旅行しても、寧ろ餘りに變化の多きに驚かしめるほど豊富なせるである。總てが詩とか哲學的なものを含んでゐるからである。西洋の山は、日本の山のやうに、森とした——などと云ふ形容詞を使へたものではなく、總てが薄つぺらである。従つて美しい豊饒な自然に育まれて來てゐる日本人の審美眼の卓拔なものも、無理はないと肯かしめるのである。

手工藝品なども、小手先の器用と、この審美眼とのために、精巧なことは、遙かに歐洲諸國をしのいでゐる。紙の美しさ、硝子細工の巧みさ、陶器の高雅さ、その他セルロイドの玩具や、三足一圓ぐらゐる。

の靴下、パナマ帽なども、どしどし西洋へ輸出されて、徒らな西洋崇拜の日本人が、屢々得意になつて外遊土産として逆輸入して來るところである。

日本人は聰明だ、感受性が強い、一見して摸倣性に富むが如くであるけれども、その鋭い頭腦は、如何なる混亂の中にあつても、さらに新しい獨創にまで到達する能力を持つてゐる。われ／＼日本人は、何故に西洋人より劣るものとして、一にも二にも卑下するか。日本を知る西洋人こそ、かへつて日本を恐れてゐるではないか。宗教を見よ、醫學を見よ、化學を見よ、何れも摸倣して以て先進國をしのいでゐるではないか。目下、日本は國を擧げて摸倣し、動搖し、混亂してゐるかに見える。しかし、これはやがて、獨創へと踏み出す前提であり、その母胎であるのだ。

藝術に於ても、徒らに西歐諸國に劣るものとして卑屈になるに

は及ばない。精緻な審美眼と、利鎌よりも鋭き頭脳と、模倣性と見えてゐる豊かな包容性とは、思想界と同じやうに混亂してゐる藝術界に於ても、明日の日の出と共に新しきものを産み出して行くであらう。

五 中宮寺の観音

和辻 哲郎

中宮寺へ行く。寺といふよりは庵室と云つた方が似つかはしいやうな小じんまりとした建物で、又尼寺らしい優しい心持もどことなく感ぜられる。ちやうど本堂の修繕中で、観音様は厨子から出して、庫裏の奥座敷に移座させてあつた。我々は次ぎの室にお客様らしく座蒲團の上に坐つて、隔ての襖をあけて貰つた。いかにも「お目にかゝる」といふ心地であつた。懐しいわが聖女は、六疊間の中央に腰掛を置いて、靜かに腰をか

ふじ哲郎
兵庫縣の人
文學者
思想家
京都帝國大學教
授

けてゐる。右手の障子で柔らげられた光線を、軽く半面にうけながら、彼女は神々しい程に優しい「魂のほゝゑみ」を浮かべて居る。それはもう「彫刻」でも「推古佛」でもなかつた。たゞ我々の心からの跪拜に價する、さうして又その跪拜に生き／＼と答へてくれる、一



中宮寺の観音

つの生きた、貴い、力強い、慈悲そのものの姿であつた。我々ほしみじみとした個人的の親しみを感じながら、透明な愛着の心で、その顔を見まもつた。

あの肌の黒いつやは、實に不思議である。ねばり強いやうな木とは思へぬ流動的な感じて、微細な面の凹凸を實に鋭敏に生かしてゐる。殊に顔の表情の細かさ、柔かさは、微妙な肉づけの注意が、この黒いつやの助けをかりて、

始めて完全に現はし得たものと思はれる。あのうつとりと閉ぢた眼にしみる、と優しい愛の涙が、実際に光つてゐるやうに見え、あの微かにほゝゑんだ唇のあたりに、この瞬間に閃いて出た愛の表情が、実際に動いて感ぜられるのは、確かにあのつやのお蔭であらう。あの頬の優しい美しさも、その頬に指先をつけた手の引きつけられる様な形によさも、腕から肩にかけての清らかな柔味も、あのつやを除いては考へられない。

我々はたゞうつとりして眺めた。心の奥では、しめやかに、静かに、とめどもなく涙が流れた。そこには慈悲と悲哀の盃がなみなみと充たされて、それをうれしく悲しく飲み干す心があつた。誠に至純な美しさで、又美しいとのみでは言ひ盡くせない神聖な美しさであつた。

私は聖女と呼んだ。観音といふ言葉よりも、その方がふさはしいと思つたからである。併しこれは聖母ではない。母であると共に處女である。マリアの美しさには、母の慈愛と、處女の清らかさとの結合が、女を淨化し、透明にした趣があるが、しかしわが聖女は慈悲の權化である。人間心奥の慈悲の願望が、その求むる所を人間の形に結晶せしめたものである。

私の知識の乏しさは、却つて容易に結論をつかませる。凡そ愛の表現として、この像は、世界の藝術の中に、比類のない獨特のものではないか。これよりも力強いもの、威嚴のあるもの、意味の深いもの、或は烈しい陶醉を現はすもの、情熱を現はすもの、それは世界に稀でもあるまい。しかしこの純粹な愛と悲しみとの標號は、その曇りのない専念の故に、その徹底した柔かさの故に、恐らく唯一な味はひを持つ。その甘美な牧歌的な、哀愁のしみ通つた心持が、若し當時の日本人の心情を反映するならば、この像は日本的特質

の表現である。古くは古事記の歌から、新しくは歌舞伎浄瑠璃の文學まで、物のあはれとしめやかな愛情とを核心とする日本人の藝術は、既にこゝにその最も優れた、最も明らかな代表者を持つてゐるのである。浮世繪の人を陶醉させる柔かさ、日本音曲の心をとろかす悲哀も、その根強い中心の動向は、あの観音に現はされた願望の一つの流れに過ぎなからう。法然、親鸞の宗教も柔弱といはれる平安朝の小説も、一つとしてあの願望と、それから流れ出る優しい心情とを基調としないものはない。

あの悲しく貴い半跏の観音像は、かく見れば、我々の文化の出発点である。最も古いといはれる古事記の歌も、時代から云つて、この像よりさまで古いものではない。もし上宮太子の文化が凝つてこの像となつたとすれば、この像は太子その人の深いしめやか

上宮太子
聖徳太子

な慈愛の現はれたもので、従つて太子は我が文化の出発点を立派に藝術の上に見せた最初の偉人であるとも云はれるであらう。太子の手に成つた日本最初の成文法なる十七條憲法が極度に人道的であるのも、亦偶然ではないのである。

が、これらの最初の事象を生み出だすに至つた母胎は、我が國の優しい自然であらう。愛らしい、親しみやすい、優雅な、その癖、いづこの自然とも同じく底知れぬ神祕を持つた我が島國の自然は、人間の姿に現はせば、あの観音となる外はない。自然に酔ふ甘美な心持は日本文化に貫通して流れてゐる著しい特長であるが、その根はあの観音と共通に、畢竟我が國土の自然自身から生ひ出でてゐるのである。葉末の露の美しさを遁さずに鋭く感受する繊細な自然の愛や、一笠一杖に身を托して、自然に融け入つて行くしめやかな自然との同化や、その分化した官能の陶醉や、飄逸な心の

法悦やは、一見この観音と甚だしく異なるやうにも思へる。しかしその異なるのは、たゞ注意の方向の相違で、捕へるところの對象にこそ差別はあれ、捕へんとする心情には、極めて近く相似たるものがある。要するに、母なるこの大地の特殊な美しさが、その胎から生まれ出でた子孫に同じ美しさを賦與したので、我が國文化の考察は、結局我が國自然の考察に歸つて行かなくてはならぬのである。

—古寺巡禮—

六 晩春の別離

島崎藤村



島崎藤村
名は春樹
長野縣の人
文學者

時は暮れ行く春よりぞ また短きはなかるらん
恨は友の別れより 更に長きはなかるらん
君を送りて花近き 高樓までもきて見れば

緑に迷ふ鶯は
白き光は佐保姫の

霞空しく鳴きかへり
春の車駕を照すかな

これより君は行く雲と
思へば琵琶の湖の
東伊吹の山高く
日は行通ふ山々の
いかにすぐれし想をか

ともに都を立出でて
岸の光にまよふ時
西には比叡・比良の峯
深き眺をふし仰ぎ
沈める波に湛ふらん

流は空し法皇の
水にうつろふ山城の
霞める姿見つくして
鈴鹿の山の波遠く

夢はるかなる鴨の水
みやびの都行く春の
畿内に迫る伊賀・伊勢の
海に落つるを望む時

いかに萬の恨をば

空行く鷺に窮むらん

春去り行かば青丹よし

奈良の都に尋ね入り

としつき君がこひ慕ふ

御堂のうちに遊ぶ時

古き藝術の花の香の

伽藍の壁に残りなば

いかに韻を身にしめて

深き思に沈むらん

さては秋津の島が根の

南の翼紀の國を

めぐりて進む黒潮の

鳴門に落ちて行く處

天際遠く白き日の

光を漏らす雲裂けて

目にはるかなる遠海の

波の躍るを望むとき

いかに胸うつ音高く

君の血潮の騒ぐらん

または名に負ふ歌枕

波に千とせの色映る

明石の浦のあさぼられ

松萬代の音に響く

舞子の濱のゆふまぐれ

もしそれ海の雲落ちて

淡路の島の影暗く

狭霧のうちに鳴き通ふ

千鳥の聲を聞くときは

いかに浦邊にさすらひて

遠き古を忍ぶらん

げに君がため山々は

雲を停めん浦々は

磯に流るゝ白波を

揚げんとすらんよしさらば

旅路遙かに野邊行かば

野邊の祕事森行かば

森のひめごと探りもて

高きに登り天地の

もなかに遊び大川の

流を窮め山々の

神をも呼ばひ谷々の

鬼をも起し歌人の

魂をも遠く返しつゝ
朽ちせぬ琴を搔鳴らせ

清しき聲をうちあげて

あゝ歌神の吹く氣息は

絶えて寂しくなりにけり

ひびき空しき天籟は

何處にかある 九つの

九つの藝術の神
ギリシヤ神話の
中の文藝を掌る
ミューズの神

藝術の神のかんづまり

アテネの宮殿の玉垣も

アテネ
古代希臘の首府

今はうつろひかはりけり

草の緑はグーリスの

牧場を今も覆ふとも

みやびつくしゝ古の

バビロン
古代バビロニア
の首府

笛の調はいづくぞや

かのバビロンの水清く

千歳の色をうつすと

柳に懸けし古の

琴は空しく流れけり

げにや大雅をこひ慕ふ

君にしあれば君がため

藝術の天に懸る日も

時を導く星影も

いづれ行くてを照しつゝ

深き光を示すらん

さらば名残はつきずとも

袂を別つ夕まぐれ

見よ影深き欄干に

煙をふくむ藤の花

北行く雁は大空の

霞に沈み鳴き歸り

彩なす雲も愁ひつゝ

君を送るに似たりけり

あゝいつか復相逢うて

もとの契をあたゝめん

梅も櫻も散りはてゝ

すでに柳はふかみどり

人はあかねど行く春を

いつまでこゝに止むべき

われに惜しむな、家苞の

一枝の筆の花の色香を

—藤村詩集—

本居宣長
伊勢國松坂の人
國學者
享和元年歿(年
七十二)

七 花のさだめ

本 居 宣 長

花は櫻。櫻は山櫻の葉赤くてりて細きが、まだらにまじりて、花しげく咲きたるは、またたぐふべきものなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻といふ中にも品々のありて、細かに見れば、一本毎にいささかかはれるところありて、またく同じきはなきやうなり。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色鮮かならず。松などの青やかに繁りたるこなたに咲けるは、殊に色はえて見ゆ。空清く



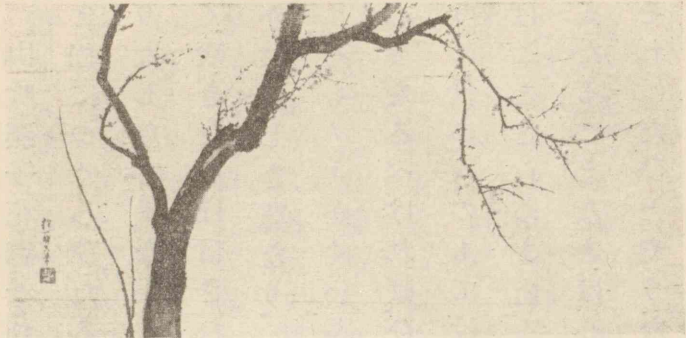
花 櫻 (筆舟曼村川)

晴れたる日、日影のさす方より見たるは、匂こよなくて、同じ花とも

紅 覺えぬまでなむ。朝日は更なり、夕ばえも。

梅 紅

梅は紅梅、ひらけさしたる程ぞいとめでたきを、さかりになるままにやう／＼しらせゆきて、見どろなくなるこそいと口惜しけれ。櫻の咲ける頃までも散ること知らで、むげにほひなく、ねびれ萎みて残りをを見れば、げにありて世の中は何事も皆かくこそと、見る春ごとに思ひ知らるか。白きはすべて香こそあれ、見るめは品おくれたり。大かた梅の花は、小さき枝を物にさして近く見たるぞ、こずゑながらよりは、まさされる。桃の花は、あまた咲きつゝきたるを遠く見たるはよし。



(筆琳光形尾)

ありて世の中
のこりなく散る
ぞめでたき櫻花
ありて世の中は
てのうければ
(古今集)

近くてはひなびたり。

山吹・燕子花・撫子・萩・薄女郎花など、とりくゝにめでたし。菊もよき程につくろひたるこそよけれ。餘りうるはしくしたゝかに作りなしたるは、なかゝに品なく、なつかしからず。躑躅・野山に多く咲きたるは目さむる心地す。海棠といふもの、唐めきてこまやかに麗しき花なり。

そもくゝかくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ。人は又思ふ心異なるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。又今やうの世の人のもてはやすめる花どもも世に多かるを、數へいでぬはことさらめきたるやうなれど、歌にも詠みたらず、古き物にも見えたることなきは、心のなしにや、懐かしからず覺ゆかし。されど、それはたひとやうなる僻心にやあらむ。

—玉かつま—

八 朝 飯

島 崎 藤 村

復た五月が來た。測候所の技手などをして居るものは誰しも同じ思であらうが、殊に自分はこの五月を堪へがたく思ふ。其日其日の勤務——氣壓を調べるとか、風力を計るとか、雲形を觀察するとか、または東京の氣象臺へ宛て、報告を作るとか、そんな仕事に追はれて、忘れ勝ちに月日を送るといふ境涯でも、あの蛙が旅情をそゝるやうに鳴出す頃になると、妙に寂しい思想を起す。旅だ——かう五月は自分に教へるのである。

いろくゝなことを憶出すのはこの月だ。ある日のことであつた。丁度自分の休暇に當つたので、事務の引續を當番の同僚に頼むつもりで書いて置いた氣壓の表を念の爲に讀んで見た。天氣晴。上昇。雲形層層積卷層。よし。それ

で自分は小高い山の上にある長野の測候所を出た。善光寺から七八町向ふの質屋の壁は白く日をうけた。庭の内も今は草木の盛な時で、柱に倚凭つて眺めると、新緑の香に壓されるやうな心地がする。熱い空氣に蒸される林檎の可憐らしい花、その周圍を飛ぶ蜜蜂の楽しい羽音すべて、見るもの聞くものは回想のなかたちであつたのである。その時自分は目を細くして幾度となく若葉の臭を嗅いで、寂しいとも心細いとも名のつけやうのない――まあ病人のやうに弱い氣分になつた。半生の間の歡うれしさや哀しさが胸の中に浮んで來た。あの長い漂泊の苦痛を考へると、よく自分のやうなものがかうして今日まで生きながらへて來たと思はれる位。破船――といふより外に自分の生涯を譬へる言葉は見當らない。それがこの山の上の港へ漂ひ着いて、世離れた測候所の技手をして雲の形を眺め暮す身にならうなどは、實に思ひもよら

ない變遷なのである。

かう思ひ耽つて居ると、誰か表の方で呼ぶやうな聲がする。何の氣なしに自分は出て見た。

旅窠れのした書生體の男が自分の前に立つた。片隅へ身を寄せて、上り框のところへ手をつき乍ら、何か低い聲で物を言出した時は、自分は直ちにその男の用事を看取つた。聞いて見ると、越後の方から出て來たもので、都にある親戚をたよりに尋ねて行くといふ。はるゝの長旅、こゝまでは迎り着いたが、途中で病のため限りある路銀を費ひ盡くして了つた。道は遠し懷中には一文も無し、足はこの通り脚氣で腫れて歩行も自由には出來かねる。情があらば助力して呉れ。頼む。かう眞實を顔にあらはして嘆願するのであつた。

「實は――まだ朝飯も食べませんやうな次第で。」

とその男は附足して言つた。

この朝飯も食べません。が自分の心を動かした。顔をあげて拜むやうな目付をしたその男の有様は、と見ると、體軀の割合に頭の大きな、下顎の圓く長い、何となく人の好きさうな人物、日に焼けて、茶色になつて、汗の少し流れたその痛々しい顔の上には、確かに落魄といふ烙印が押しあて、あつた。悲しい追憶の情は、その時、自分の胸を突いて湧き上つて來た。自分も矢張りその男と同じやうに、飢と疲勞とで慄へたことを思出した。目的もなく彷徨ひ歩いたことを思ひ出した。恥を忘れて人の門に立つた時は、思はず涙が頬をつたつて流れたことを思出した。

「まあ君、そこへ腰掛けたまへ。」

と自分は馴々しい調子で言つた。男は自分の思惑を憚るかして、妙な顔して、たゞもう悄然と震へ乍ら立つて居る。

「何しろそれは御困りでせう。」と自分は言葉をつけた。「僕の家では君、かういふ規則にして居る。何かしら爲て來ない人には、決して物を上げないといふことにして居る。だつて君、さうぢやないか。僕だつて働かずには生きて居られないぢやないか。その汗を流して手に入れたものを、たゞで他に上げるといふことは出來ない。貰ふ方の人から言つても、たゞ物を貰ふといふ法はなからう。」

かう言ひ乍ら、自分は十錢銀貨一つ取出して、それを男の前に置いて、

「僕の家ばかりぢやない。何處の家へ行つてもさうだらうと思ふんだ。たゞ呉れろと言はれて快く出すものは無い。これから君が東京迄も行かうと言ふのに、そんな方法で旅が出来るものか。だからさ、それを僕が君に忠告してやる。何か爲て働いてそれか

ら頼むといふ氣を起したらば如何かね。」

「はい。」と男は額に手を當てた。

「こんなことを言つたら、妙な人だと君は思ふかも知れないが——」と自分は學生生活もしたらしい男の手を眺めて、僕も君等の時代には随分困つたことがある——そりやもう、辛い目に出遇つたことがある。丁度君が今日の境遇を僕も通り越して來たものさ。さもなければ、君、誰がこんな忠告などをするものか。實際君の苦しい有様を見ると、僕は大きい同情を寄せる。まあ僕は哭きたいやうな氣が起る。眞實に苦しんで見たものでなければ、苦しんでゐる人の心地はわからないからね。そこだ。もし君に僕の言ふことを聞く氣があるなら、一つ働いて通る量見になりたまへ。何か君に出来ることがあるだらう。——まあ、歌を唄ふとか、御經を唱げるとか、または尺八を吹くとかさ。」

「どうもこれと言ふ藝は御座いませんが、尺八なら少しはひねくつたことも——」と男は寂しさうに笑ひ乍ら答へた。

「む、尺八が吹けるね。それ見給へ、さういふ藝があるなら賣るが可いちやないか、賣るべし。無くてさへ賣らうといふ今の世の中に、有つても隠して持つてゐるなんて、そんな君のやうな人があつたものか。ではかうするさ——僕が今、君に尺八を買ふだけの金をあげるから粗末な竹でも何でもい、一本手に入れて、それを吹いて、それから旅をする、といふことにしたまへ——兎に角これだけあつたら讓つて呉れるだらう——それ十錢上げる。」

かう言つて、そこに出した銀貨を男の手に握らせた。

「人の一生といふものは、君、どうなるか解らない。」と自分は男の顔を熟視り乍ら言つた。「これから將來、君がどんな出世をするかも知れない。僕がまた今日の君のやうに困らないとも限らない。」

まあ君、左様ぢやないか。もし君が壯大な邸宅でも構へるといふ時代に、僕が困つて行くやうなことがあつたら、その時は君、宜敷頼みますぜ。」

「へ、へ、へ」と男は苦笑ひした。

「いゝかね。僕の言つたことを君は守らんければ不可よ。尺八を買はないうちに食つてしまつては不可よ。」

「はい食べません。決して食べません。」

と男は言葉に力を入れて、堅く／＼誓ふやうに答へた。

やがて男は元氣づいて出て行つた。施與といふことはこんなもので、施された人も幸福ではあらうが、施した當人の方は尙更心嬉しい。自分は饑ゑた人を捉まへて、説法を聞かせたとも氣付かなかつた。「十錢呉れてやつた上に、助言もしてやつたし、まあ、二つ恵んでやつた」と考へて自分のした事を二倍にして喜んだ。五月

―追憶の五月―寂しい旅情は僅かにかういふことで慰められたのである。

しばらくして、水汲みから歸つて來た下女に聞くと、その男は自分の家を出ると、直ぐに一ぜんめしの看板をかけた飲食店へ入つたといふ。その時自分は男の言葉を思出して、「まだ朝飯も食べません」と繰返して笑つた。定めし男の方でも、自分の言葉を思出して、「説法も有難いが、朝飯の方が尙更有難い」とかなんとか獨語を言ひ乍ら、その日の糧にありついたことであらう。―現代小説全集―

九 築山先生に上る書

頼 山 陽

幸便に任せ一筆申上げ奉り候。残暑の節益々御勇健に御座あそばされ候ことと存じ奉り候。

去臘は色々と御世話下され、御別の刻も御親切の條々、肝に銘じ

頼山陽
名は襄
安齋の人
江戸時代の學者
天保三年歿(年
五十三)
築山先生
通稱嘉平
山陽の武道の師

父
 名は惟寛
 號は春水
 安藝の人
 藩の儒官をつと
 めた
 文化十三年歿

忘れ難く候。さてこの度内々心事申上げ度き儀これあり候。誠に父儀土民より御取立を被り、外諸士よりも御國恩海山に御座候へば、その子たる者、粉骨壘身仕り候て御奉公申すべき筈に御座候ところ、只今の身分に相成り致し方これなく、又假令再び御使下され候儀萬一出来仕り候とも、生得多病弱質、少しの事にも耐へ兼ね候故、甚だ覺束なく、強ひて相勤め候ては、却つて事を傷り、不忠不孝を増し候やうのこと出来致し候やも測りがたく、且又私一家重疊に官祿を忝う仕り候故、一人は浪人仕る方、天道にもかなひ申すべく候はんか。又奉公仕らずとも、御報恩のいたし方これなしとは申すべからず候。經書講釋等は不得手の儀、得手と申しては史學文學に御座候。これにて少々なりとも御國の御用に相立ち候儀仕り度く、乃ち籠居以來日本外史と申す武家の記録二十二卷著述成就仕り居り候へども、これは區々たるものにて、引用の書ども不

自由、私心に満ち申さず候。愚父壯年のころより、本朝編年の史輯め申し度き志に御座候ひしが、官事繁多にて、十枚ばかり致し置き



候まゝにて相止め候。私儀幸ひ閑人に御座候故、父の志を継ぎこの業を成就仕り、日頼本にて必要の大典は藝州の書物と人に呼山ばせ申したき念願に御座候。この儀三都陽に居り申し候て、書物を廣く取り集め、多聞の友を多く取り申さずては出来仕らぬこと、に御座候。水戸の日本史なども、江戸に

史館御建てあそばされ候はこのわけに御座候。不肖の私に御座候へども、右の場所へ出で、名儒俊才に附合も致し、學業成就、名を天下に揚げ、末代までも、藝州に何某と呼ばれ候はゞ、螢火にて月光を増し候譬にて、すこしは御國の光ともなり申すべきか。

去冬此方へまゐり候件、私好み申さざる事に御座候へども、已に家長より願ひ出で候儀、今更辭退も仕りがたく、急に追ひ立てられ罷り越し候。誠に草原にて馬子・牛飼の外は談話仕り候べき人もこれなく候。廣島に居り候ひし節は、また時節もこれあり候は、都會へ出づることとやと、空頼みに存じ候ひしが、今はその頼みも絶え果て候故、日夜悲歎仕り居り候。

福山の公邊
備後福山藩
藩主阿部氏

菅先生
通稱太中、茶山
と號した
備後の人
著名の漢詩人

然る處福山の公邊にて私を取り放し申さざるやうと、役人共かれこれ談合仕り、私に知行取らせ、士儒に取り立て申したき旨、内意菅先生より申し聞かせられ候。先生には、私所存をば承知これなく承引仕るべき旨、勧められ候。私答へ候に、「これは案外のこと承はり候。私奉公出来候身に候は、本國にて仕り申すべき筈なれば、如何やうの御勸にても、決して従ふべきやう御座なし」と答へ候に、「これは小國故きらひ候か。小國にても俸祿はよろし」と申され

候故、私は義の一字を申し候。義に協ひ申さざる儀に候はば、假令加賀・薩摩より所望にあづかり候とも、見向も仕らぬ料簡に御座候。大恩の本國に尺寸の勞をも盡し申さず、他國にておめおめと出仕候こと、私畜生ならば知らず、苟も人にて御座候上は、何の面目にて

雲耶山耶吳耶越 水天琴弗青一髮萬
里泊舟天草洋 煙橫蓬窓日漸
大魚波間跳 太白當船明似月

山陽筆蹟

加賀 前田氏
薩摩 鹿兒島藩 島津氏
筆蹟 雲耶山耶吳耶越、水天琴弗青一髮萬里泊舟天草洋、煙橫蓬窓日漸、大魚波間跳、太白當船明似月
西遊舊作書寫、山内彈正公子、時己丑九月去、遊時己十二年矣

天下の人に對し申すべきか」と申し切り候。

右様の儀は幾重にも相ことわり、この方申分相立て候こともこれあるべく候へども、私多年の願望遂げ候期はこれなきやうに相見え候。何分年少氣銳のうち、一度大處へ出で、當世の才俊と呼

叔父
春風・杏坪等

太中
菅茶山

ばれ候者共と勝負を決し申し度く存じ奉り候。家父叔父共は御承知の氣遣ひ手に御座候故、とかく手放し候こと致しかね、爰許にても兄弟同様の太中にあづけ置き、その中に年も寄り候はゞ分別



菅茶山

なほり申すべしと心組み候へども、私は若氣のみにてはこれなく、前段の大志御座候故に御座候。この念願と申すも、人に少しも世話をかけ、物入をさせ候こともこれなく、唯一言の許を受け候はゞ、私一分の才覺を以て一人口喰ひ候ことは如何とも仕り、家元よりの仕送等は一錢も煩はし申さぬつもりに御座候。

家父老年に相成り候で、他處へ罷り越し候儀いかゞに御座候へども、此處に居り候も、京大阪へ參り居り候も、五十歩百歩のちがひ

に候。此處にかれこれと月日を積み候うち、菅先生養育の恩義は日々重り候て、去り難く相成り申すべく、さりとても多年の念願無に仕り候も残念至極、いかが仕るべきかと案じ煩ひ居り申し候。何卒尊公様の御憐愍にて一人一人御救ひ下され、本意を遂げさせ下され候ことは出来申すまじくや。さやうにも相成り候はば、英氣は百倍仕り、多病の身も學問出精、天下の人に一人も追いつかせ申さざる料簡に御座候。かやうの存念、廣島にをり候ひし節より申し上げ度く存じながら、憚多く時節も到來仕らずと存じ黙止仕り居り候へども、尊公様ならではこの儀御決斷下され候人はこれなく候故、この度憚をも顧みず、生涯の浮沈と覺悟相極め申し上げ候。懼れながらよくよく御勘辨下され、何卒尊公様の御心附として仰せ出され下さるべく、もし尊公様御取計にて私生涯の大望御遂げさせ下され候はゞ、この御恩生々世々忘却仕るまじく候。

心事盡し難し、萬々御推察遊ばされ下さるべく候。頓首敬具

一〇 西郷と大久保

山本有三

大久保邸客間

床に

相看兩不厭

只有敬亭山

と大書した幅が掛かつてゐる。

伊藤(博文)が椅子にかけて待つてゐる。稍待ちくたびれた形で、幅な
どを見てゐる。

家令が這入つて来る。

家令大變お待ちを願ひまして、もう間もなくお歸りになると存
じますか……



山本有三
名は勇造
栃木縣の人
文學者



伊藤 博文

伊藤いや。先程から感服してゐるんですが、見事な書です。ね。
(幅の近くに寄り)
雪蓬といふのはどういふ人です。

家令何でも西郷さんが沖の
永良部島へ島流しにお
なりになつた時、この方
もそこにおいてになつ
たので、お知合ひになつ
たのだとか伺つて居り
ます。たしか西郷さんはこのお方から、いくらか書をお習ひ
になつたのぢや御座いませぬかな。
伊藤ふム。それにこの句がいゝ。「相看^{ふたつちが}て兩^{ふたつちが}ら厭はず。只敬亭山
有り。」實にいゝ句だ。

家令雪蓬といふ方は、この李白の詩が大層お好きで、筆をお執りになると、この句ばかりお書きになるんださうです。——あ、お歸りになりました。

大久保が這入つて来る。

大久保 どうも不在にして御無禮しました。何か急用ですか。

伊藤 少々御意嚮を伺ひたいことが御座いまして。

大久保 さうですか。勝さんと話が長くなつたものだから……

伊藤 あ、あの件ですか。如何でした。お引受けになりましたか。

大久保 それは引受けて貰つたさ。征韓派の面々が去つた後、すぐに後繼内閣が組織出来ないやうであつては、天下に面皮がないではありませんか。なあに、五參議が揃つて辭職しようとも、何の事もありはしません。

伊藤 實はその後任問題について上りましたのですが、西郷さんの

辭表はどう裁きましたものでせう。

大久保 それは昨日岩倉公に御返事を差上げてあります。

伊藤 辭任を聴き届けよといふのでございませう。併し外の方と違つて、西郷さんでございますからな。岩倉公も一方ならぬ御心配で、是非ともお差留めに相成りたいと仰せになつてをりますのですが……

大久保 いや、引留める要はありません。止めたいといふものは止めさせる方が却てよろしい。その方が當人のためです。

伊藤 けれども、それは如何にも忍びないことですから……

大久保 いや、無駄な手数は省くことです。第一、引留めようとして留るやうな西郷ではありません。現に黒田が行つてさへ徒勞だつたのではありませんか。

伊藤 それはさうですが……

大久保 陸軍大將だけは従前の通りといふことにして、参議並びに近衛都督はお役御免になされるのが、この際至極の御處置と思ひます。

伊藤 (なほ躊躇しながら) それでよろしうございますかな。

大久保 (きつぱり) よろしいですとも。



大久保 通利

伊藤 西郷さんの辭表が出た時、僕はあなたこそ第一にお引留めになる御方と思つて居りました。

御意見の相違は相違。これはこれで、また別ですからな。

大久保 いや、この際は引留めないのが本當です。彼を引留めない者こそ、彼を最もよく知つてゐるものといふべきでせう。

氣まゝにさしておやりなさい。その方が却て西郷もうるさくないでせう。

伊藤 さうですか。

大久保 わたしはいつかはかういふ日の來ることを臆げながら豫期してゐました。今回の事がなくとも、これは早晚免るゝことの出來ないものです。それが今來たまでです。このことは戊辰の役に於て、鐵砲の音がたと止んだ瞬間に、わたしは豫感したことです。わたしと西郷とは兩立し難い人間です。例へば冬と夏とのやうなものです。二人は當然離るべき運星なのです。

伊藤 併しお二人は今日まで、殆ど一體のやうになつてお働きになつたのではありませんか。

大久保 御一新前まではさうでした。世の中が不順であつたからで

す。夏のさ中に、雪が降るやうな時勢であつたから、それが目立たなかつたのです。けれども物事が緒について、時候が追定まつてくれば、夏は夏、冬は冬、それごとくその位置に返るのが順當でせう。そして夏は夏らしく、冬は冬らしくあつてこそ、然るべきものだ、わたしは思つてゐます。

伊藤西郷さんも、さう思つておいででせうか。

大久保さ、西郷はどう思つてゐますか。

間。

大久保伊藤君、西郷が今度、どうして、あんなに向むかになつたのか、知つてゐますか。

伊藤向になつたといひますと……

大久保あの男はいつも黙々としてを、つて、滅多に自分の意見を吐かない男です。わたしが見込を述べると、わが汝のいゝやうに。さ

う云つて、決して逆つたことがありません。功は人に譲り、自分分はうしろに引下つてゐるといふ性質の人間です。それが今度の御評議に限つて、どうしてあんなに突張つたのか。君はそこに氣がつかせませんでしたか。

伊藤自身の御持論を飽くまでも御主張になつたものと私は思つてをりましたが……

大久保それは無論さうです。併し伊藤君、西郷は實は死にたかつたのですよ。朝鮮を自分の死場所にしたかつたのです。

伊藤(無言。大久保の顔を覗くやうに見る。)

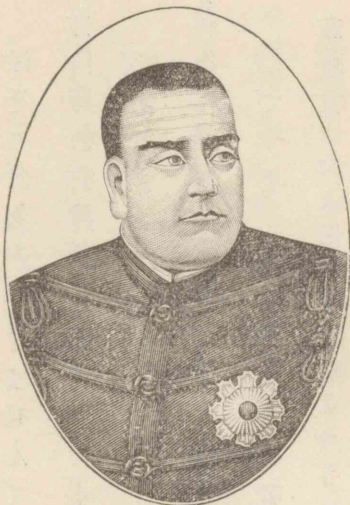
大久保あの男は死を急いでをるのです。いつか私にこんなことを言つたことがあります。「己はもう、一度死んだのだから、天地に家はないのだ。」知つてゐるでせう。彼は月照和尚と海に投じて、自分だけ助かつた、あの事をいふのです。

月照
京都清水寺成就
院の住職
安政五年十一月
隆盛と共に海に
投ず

順聖公
島津齊彬
安政五年歿

伊藤存じてゐます。

大久保それからまた、自分を取立て、下すつた順聖公様じゆんせいこうがおかくれになつた時、西郷は追腹を切らうとして果さなかつたこともあるのです。それやこれやで、自分は主におくれ、同志におく



西郷隆盛

れてゐるといふ慚愧の念が、絶えず頭にあるのです。その上現在の三郎公にはひどく疎まれてをりますし……

伊藤なるほど……

大久保ですからどうせ捨てる生命なら、朝鮮に行つて捨てたい。そして自分の屍を橋渡にして、若い軍人どもを働かしてやりたい。手柄を立てさせてやりたい。かう西郷は思つてゐるの

です。わたしは彼のさうした心の中を思ふと、實際死なしてやりたく思ひます。死なしてやることが、むしろ西郷を生かしてやることのやうに思ひました。併しわたしまでがそんな心に引き入れられるやうであつてはなりません。どんなことをしても、西郷には生きてゐて貰はなくつてはなりません。國家の大局からは申すまでもなく、西郷一身のためから申しても、斷じて彼を死なせることは出来ません。西郷は恐らくわたしを怨んでゐるでせう。併しどんなにどんなに怨まれても、わたしは彼を殺すわけにはいきません。——ところが伊藤君、わたしは嘗て西郷に死を迫つたことがあるのですよ。

伊藤あなたがですか。それはいつものあなたにも似合はない振舞ですな。

大久保わたしも若かつた。それはもう十何年も前の話です。丁度西郷が大島から召還されて、三郎公のお伴をして京へ上る時のことでした。殿にはもと／＼御覚えがよくないところへ、憂國の心からは申せ、お言付を待たないで、西郷が少し取計つたことをしたために、彼は忽ち召捕られるやうな羽目に立至つたのです。わたしはその時つく／＼世の中が厭になりました。一心同體の西郷がこんなことになつては、もう討幕の望みも何もない。こんな位ならいつそのこと、二人刺し違へて死んでしまつた方が増しだ。さう決心して、彼を濱邊に誘ひ出したことがあるのです。

伊藤それが今度は、思はない事で刺し違へてしまつたわけですね。大久保人生の事思議すべからずです。西郷は月照と死なうとして死ねなかつた。わたしは西郷と死なうとして死ねなかつた。

西郷がいつかわたしにいつたことがあります。「人間は死なうとしても中々死ぬるものでなく、生きようとしても案外生きられないものだ。」それを聞いた時には、それ程にも思ひませんでした。が、わたしは今その言葉をしみ／＼思ひ出します。書生が這入つて来る。

書生あの西郷さんがお歸りになつてしまつたさうです。

大久保國へか。

書生はい。たゞ今役所から知らせて参りました。

大久保さうか。——とう／＼歸つてしまつたか。

伊藤すると西郷さんへの辭令は、どうしてもあなたが仰しやつた通りにする外はありませんな。

大久保(うなづく)

伊藤では、私は早速歸つて、岩倉公に復命いたしませう。

伊藤去る。

大久保書生を呼ぶ。

大久保おい、その掛物を掛け變へてくれ。

書生何を掛けませう。

大久保何でもいい。南洲のものを掛けてくれ。

書生幅を掛けかへる。それは

「盡人事、俟天命」南洲書

と書した一軸である。

書生これでよろしうございますか。

大久保うム。

書生去る。

大久保しづかに立つて床の間に香を焚く。

夕暮と共に部屋の中が次第に暗くなる。併し外はまだ明るい。西

日を受けた障子に庭の松影が黒々とうつつてゐる。

大久保じつと黙したまゝてゐる。

幕

一一 西郷南洲

安政五年の霜月なかば、

月影碎くる薩摩のせとの

波間に沈みし刎頸の友、

一人は死して大義に殉し、

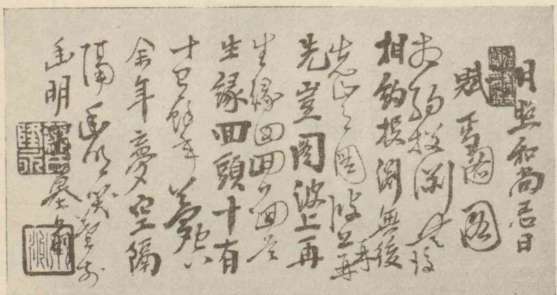
くしくも君はよみがへり、

宏謨を翼けて素志を成しぬ。

哀れは盡きせず、懐往の詩。

相約投淵無後先 豈圖波上再生縁

回頭十有餘年夢 空隔幽明哭墓前

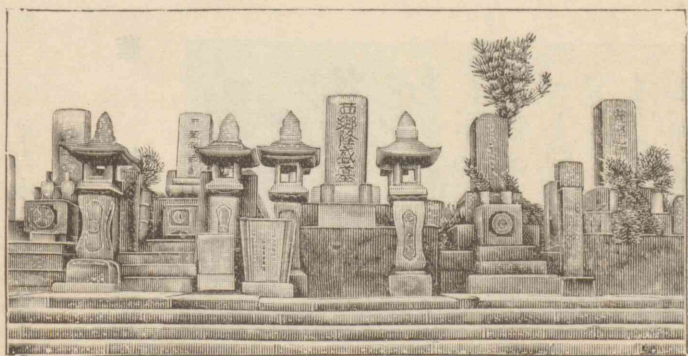


西郷隆盛筆蹟

藤村作

—山本有三全集—

自ら危き使に死して、
 國威の張るべき基を立つと
 至誠をこめたる征韓の論
 破れし恨残さぬ心、
 再び世事を口にせず、
 都督の重任辭して去りぬ。
 逸情見るべし村莊の詩。
 我家松籟洗塵縁、滿身清風身欲仙、
 誤作京華名利客、此聲不聽已三年。
 死所を求めて死所に遭はず、
 笑つて殘骸子弟にゆるし、



墓の等弟子のそび及盛隆郷西

洞庭
 中華民國湖南省
 北方の大湖

賊の名負ひつゝ世を去りし君、
 得喪毀譽のほだしを斷ちし、
 あゝ我が無我の英雄の
 高風誰かは慕はざらん。
 尊ぶべきかな、述懐の詩。
 幾經辛酸志始堅、丈夫玉碎愧輒全、
 我家遺法人知否、不爲兒孫買美田。

一二 松島と象潟

松尾芭蕉

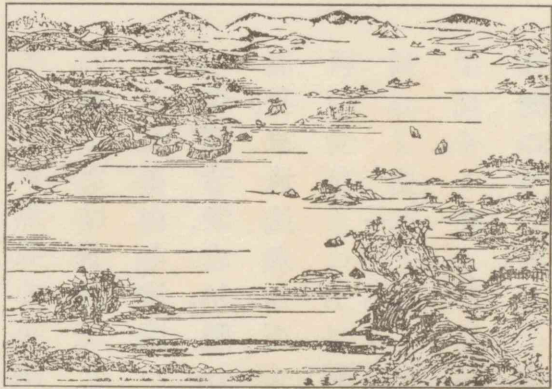
松島

日既に午に近し。舟を借りて松島に渡る。その間二里餘。雄
 島が磯に着く。
 抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西

西湖
中華民國浙江省
に在る湖
洞庭と共に有名
な勝地
浙江
錢塘江

大山つみ
大山津見神
山を掌る神

雲居禪師
希賢
瑞巖寺中興の僧
萬治二年寂



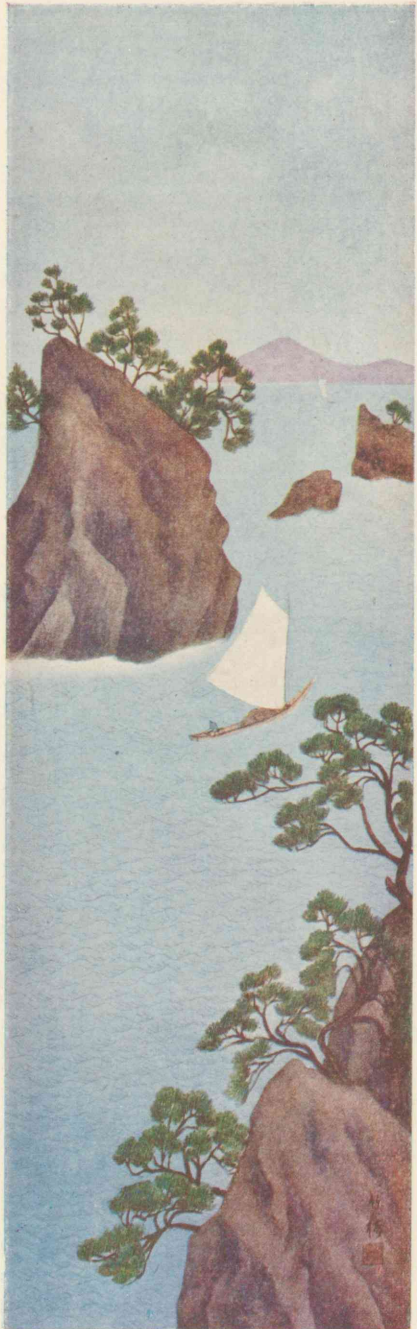
(芭蕉翁繪詞傳)

松島

あるは二重にかさなり、三重にたたみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるが如し。その景色宥然として美人の顔をよそふ。ちはやぶる神のむかし、大山つみのなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞をつくさん。

雄島が磯は地つづきて海に出てたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、松の木蔭に世をいとふ人も稀々見え

松島



(小野竹橋筆)

侍りて、落葉松笠など打ちけぶりたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心ちはせらるれ。

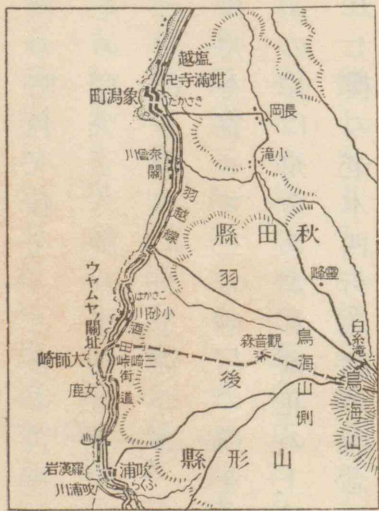
松島や鶴に身をかれほとゝぎす

曾良

象 潟

江山水陸の風光、數を盡くして、今象潟に方寸を責む。酒田の港より東北の方山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、その際十里、日影や、傾く頃、汐風眞砂を吹きあげ、雨朦朧として鳥海の山隠る。闇中に

象潟
秋田縣西南部の
名勝地
今の象潟驛附近
の地



圖地方地潟象

雨も亦奇なり
水光激瀾^{シラ}晴偏^{シラ}
好^{シラ}。山色空濛^{シラ}
雨亦奇^{シラ}（蘇軾）

花の上漕ぐ
象潟の櫻は波に
うづもれて花の
上漕ぐ海人の釣
り舟（西行）



五月月の象潟

摸索して、雨も亦奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蟹の苫屋に膝を容れて、雨の霽るゝを待つ。その朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほど、象潟に舟を浮かぶ。まづ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸に舟をあがれば、花の上漕ぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念を残す。江上に御陵あり、神功皇后の御陵といふ。寺を干満珠寺といふ。この處に行幸ありし事未だ聞かず、いかなる事にか。この寺の方丈に坐して、簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、その影うつりて江にあり、西はうやむやの關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙かに海北に構へて、波打ち入るる所を汐越といふ。

江の縦横一里ばかり、倂松島に通ひて又異なり。松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施が合歡の花
汐越や鶴はぎ濡れて海涼し

—奥の細道—

一三 詩人芭蕉

藤岡東圃

藤岡東圃
名は作太郎
金澤の人
國文學者
文學博士
明治四十三年歿
(年四十一)
白樂天
字は居易
唐の詩人
寒山子
唐の詩僧



革新の旗を翻して天下の俳風を一變したりしは松尾桃青なり。桃青又芭蕉と號す。伊賀上野の人。初、その地の城代藤堂氏に仕へしが、後、主家と世事とを謝して専ら風流三昧に入る。その俳諧の經歷を尋ねれば、まづ京に出でて北村季吟の門に古風を學び、又流行を追うて檀林風を弄ぶ。芭蕉もとより學才あり。詩にありては白樂天の平易、寒山子の禪機を喜び、別けて李杜の風格を慕ふ。

李 李白
字は太白
唐の詩人

杜 杜甫
字は少陵
唐の詩人

西行 俗名佐藤義清
建久元年寂

桃青の稱も李白と相對せしめんが爲なりと傳ふ。わが國にては最も西行に私淑して、その山家集によりてこそ正風の眼は開けたれ。旅行の癖も亦この自然詩人に負ふところあり。後年江戸に



(筆風杉山杉)

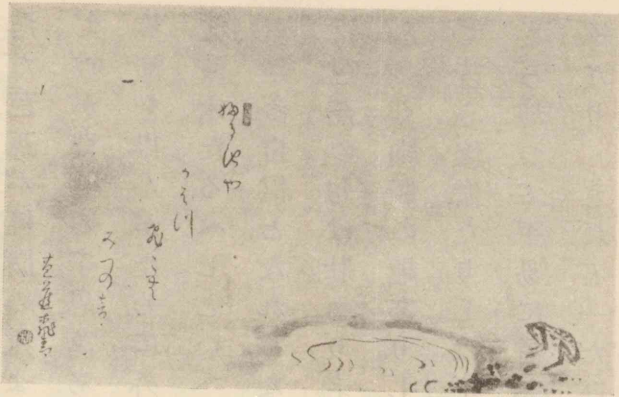
従來蹈襲の俳句に臨めば、造化の隱微を究め自然の祕鑰を開くべき詩の本義いづこにありとも知らず。この玩具の如き文學の形式によりて胸裡に鬱勃たる感情と、目睫に映じ來る森羅萬象とを

松尾芭蕉の定住して後も、屢道祖神にそそのかされて天外放浪の客となる。げにも抖擻行脚は芭蕉が一生の行樂、諸國の名所舊跡にして彼の詩囊に入らざるもの幾何かある。かゝる經驗を以て

筆蹟

ふる池やかはづ
飛とむみづの音
芭蕉桃青

筌蹄
筌者所_レ以_レ在_レ魚
得_レ魚而忘_レ筌
蹄者所_レ以_レ在_レ兔
得_レ兔而忘_レ蹄
(莊子外物篇)



芭蕉筆蹟

寫さんとすれば茫然自失せざらんと欲するも得んや。李杜西行の詩歌は、さすがに宇宙の玄理を解して人生の奥底に觸れ、千載の後讀者をして光風霽月の襟度を偲ばしむ。されど國異なれば言語同じからず、星移れば人情もまた變ず。彼等が詩形、美は美なりといへども直ちにわが筆に入らず、即ち之を今に用ひんや。筌蹄は問はず、魚鳥を狙へ。月をだに忘れずば、指自ら指さん。これぞ芭蕉が根本の主張にして、用語は現代を標準とすれども、取材は必ずしも月・雪花・紅葉とも限らず、見るものにつけ感興の浮ぶがまゝに打出し、先哲の跡を見ずして、その意を見る。さては、ふる池や蛙飛び込

む水の音の一句に至りて、忽然として轉迷解悟の境に入れりといふ。この一句、詩としての價値はさばかりに高しともおもはれず、ただ芭蕉が經歷の上より見て、すなはち無量の妙味あり。今日まで彼が費せる千思萬考、皆たゞこの境に臨んで即ち應ずる一味の筈蹄を得んがために外ならざりけり。中心の感情は本、技巧の波文は末たるべしといへる年來の所説は、こゝに至りて動かすべからざる自信となれるなりけり。

芭蕉の句は壯より老に及びて三たび變化す。漢語を用ふること多く、絢爛の趣ありしはその初なり。華實併せ得んことを欲して苦心慘憺たりしはその中なり。切磋琢磨の功を終へて、思ふところ却つて平易に、言ふべからざる輕味を有するに至れるはその終なり。されど一たび古池の響に得たる信仰は生涯を通じて變ぜず、よく俳諧をして盛唐の詩、西行の和歌と比較して軒輊するところなきに至らしむ。翁もまた偉なるかな。

—國文學史講話—

一四 芳流閣

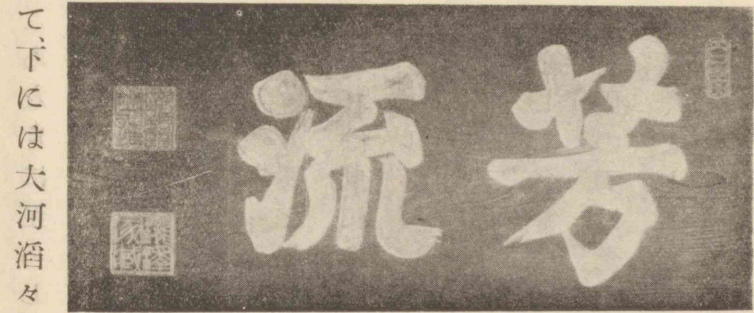
瀧澤馬琴

瀧澤馬琴
名は解
曲亭・馬琴・著作
堂等と號す
江戸時代の小説
家
嘉永元年歿（年
八十二）

滯我
下總國猿島郡古
河町

古の人謂はずや、禍福は糾へる繩の如し」と。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。それは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極を知らん。憐れむべし、犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身に傳けつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、遙々滯我へもたらして、名を揚げ、家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の刃は舊の物ならで、我が身を劈く讐とぞなりし、憾をこゝに釋くよしもなく、猝急にして、意外にあり。僅かに當座の辱しめを避けばやと思ふばかりに、夥の圍を殺開きて、芳流閣の屋の上に、攀ち上れども、左右に、脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を究

めたる心の中はいかなりけん、想像るだにいと痛まし。



されば又、犬飼見八信道は、犯せる罪のあら
ずして、月來獄舎に繋がれし、禍は今恩赦の福、
我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、
犬塚信乃を搦めよとて、愁に擇み出だされつ。
他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願
はしからずと思へども、推辭みて許さるべく
蹟 筆 琴 馬 潭 瀧
もあらぬ、君命重し、彌高き彼の樓閣は三層な
り。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて
登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく、
堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾
蒸の燄熱を渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似
て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝る、溯洄は名に負ふ坂東

成氏 古河公方足利成氏
横堀史在村 成氏の老臣
墨氏 墨翟
魯般 周の人
公輸般 魯の人

太郎水際の小舟楫を絶えて、進退すてに谷りし、敵にしあればいか
でわれ、繋ぎ留めんと、颯の樹傳ふ如くさらくと、登りはてたる三
層の屋根には、目柴翳す由もなく、迭に透を窺ひつゝ、疾視へあうて
立つたる形勢、浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の窺ふに似たりけり。
廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に尻
を打ち掛けて、勝負いかにと見上げたる。又只閣の東西には、身甲
したる許多の士卒、槍長刀を見かし、或は箭を負ひ、弓杖突き立て、組
んで落ちなば、撃ち留めんとて、項を反らしてこれを觀る。加之外
面は、綿連として杳かなる河水、繞りて砌を浸せば、借使信乃武事長
け、膂力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らされば、
虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なれば、地上に下るべ
くもあらず。渠鳥ならずとも、羅に入りぬ、獸ならずも狩場に在り。
三寸息絶ゆれば、絆みな休まん、脱れはてじと見えたりけり。

膳臣巴提便
 欽明天皇の七年
 百濟に使した時
 虎穴に入つて虎
 を刺殺した
 富田三郎
 和田義盛の臣
 源實朝の面前で
 大鹿の二本の角
 を一度に折つた

その時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追ひ登らんとせし兵等を、欣落しつる後は、絶えて近づく者なきに、今たゞ獨り登り來ぬるは、世に覺えある力士ならん。這奴はこれ、膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、また富田三郎が鹿の角を裂く力あるか。遮莫一個の敵なり、引組んで刺迭へ、死するに難き事やはある。よき敵にこそ御座んなれ、目に物見せんと血刀を、袴の稜もて推拭ひ、高瀬の如き方桴に立つたる儘に寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中よりこの役義に、擇み出だされし甲斐もなし。搦め捕るとも撃たるゝとも、勝負を一時に決せんものを、と思ひにければちつとも擬議せず、御詫さふと呼び掛けて、拿たる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず。心得たりと、鋭き太刀風に撃つ

を發石と受け留めて、拂へば透かさず、數刀尖を、扨へて流す一上一下、下たる蕘を踏み駐めて、頻りに進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練

芳流閣上の戦



(原本挿繪)

の働き、岌より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬きもせず氣を籠めて、見る目もいと々、迥かなり。

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば、勇氣彌倍して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に戦ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か、と

見るばかりなる、いと高閣の棟にして、死を争ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖脇當のはづれを、裏かくまでに切り裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かて、初めに浅痕を負ひしより、漸々に疼みを覺ゆれども、足場を揣りて、撓まず去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと被けたる聲とともに、眉間を望みて礮と打つ、十手を丁と受け留むる、信乃が刃は鏑際より折れて遙かに飛び失せつ。見八得たりと無手と組むを、そがまゝ左手に引き着けて、迭に利腕楚と取り、振り倒さんと曳聲合はして、揉みつ揉まるゝ力足、此彼ひとしく踏み込らして、河邊の方へ滾々と、身を輾ばせし覆車の米苞坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる藁の勢ひ、止まるべくもあらざれど、迭に拿つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繫げ



弓張月

東京の人
文學者
昭和二年歿（年三十六）

弓張月

樁説弓張月
源爲朝を主人公とした小説
馬琴傑作の一
南柯夢
三七全傳南柯夢
傳奇小説
馬琴傑作の一

る小舟の中へ、打累りつゝ、挫と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水煙、纜丁と張り斷りて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐き出だされつ。爾も追風と虚潮に、誘ふ水なる洄舟、行方も知らずなりにけり。

—南總里見八犬傳—

一五 馬琴の心境

芥川龍之介

「これは初から書直すより外はない。」

馬琴は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向ふへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で「弓張月」を書き「南柯夢」を書き、さうして、今現に「八犬傳」を書きつゝある。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、蟄の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、そ

これらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな忌はしい不安を禁ずることが出来ない。

「自分はさつきまで本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると人並に己惚の一つだつたかも知れない。」

かういふ不安は彼の上に何よりも堪へ難い落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩に對しては傲慢であると共に、飽くまでも不遜である。

その彼が結局、自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことをどうして易々と認められよう。しかも彼の強大な「我は、さとり」と「あきらめ」

遼東の豕
遼東有豕、生子白頭、異而獻之、行至河東、見群豕皆白、懷慙還。
(漢書、朱浮傳)

とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひ續けた。若しこの時、彼の後の



瀧澤馬琴

襖がけたましく開けはなされなかつたら、さうして「お祖父様只今」といふ聲とともに柔かい小さな手が彼の頭へ抱きつかなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、いつまでも

鎖されてゐた事であらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

太郎
馬琴の息宗伯の子

「お祖父様、たゞ今。」

「お、よく早く歸つて来たな。」

この語と共に、「八犬傳」の著者の皺だらけな顔には別人のやうな悦が輝いた。

茶の間の方では甲高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から倅の宗伯も歸り合せたのらしい。太郎は祖父の膝に跨りながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣に曝された頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋附を着た太郎は突然かういひ出した。考へようと努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、ゑくぼが

何度も消えたり出来たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日。」

「御勉強なさい。」

馬琴はとうとう噴き出した。が、笑の中ですぐまた語をつぎながら、

「それから。」

「それから。え、と。痛癢を起しちやいけませんつて。」

「おや、それきりかい。」

「まだあるの。」

「どんな事が。」

「え、と。お祖父様はね。今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりませうから。」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず真面目な聲を出した。

「もつとくよく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事をいつたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯いたづらさうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな。けふ御佛参に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて来たのだらう。」

「違ふ。」

断然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰をもたげな

がら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の観音様がさういつたの。」

浅草の観音
東京市浅草區に
ある金龍山浅草
寺の本尊



里見八犬傳の表紙

かういふとともに、この子供は家内中に聞えさうな聲で、嬉しうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小さな

手を叩きながら、轉げるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に嚴肅な何物か、刹那に閃いたのはこの時である。

彼の唇には幸福の微笑が浮んだ。それと共に彼の目にはいつ

か涙が一ばいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふところではない。この時、孫の口からかういふ語を聞いたのが不思議なのである。

「観音様がさういつたのか。勉強しろ、痛癢を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

その夜の事である。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へははいつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

始め筆を下した時、彼の頭の中にはかすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と、筆が進むのに従つて、その光のやうなもの次第に大きさを増して來る。經驗上、その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起すことを知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ……

「あせるな。さうして出來るだけ深く考へろ。」

馬琴はやゝもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に向いた。が、頭の中にはもうさつきの星を砕いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうして、それが刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。

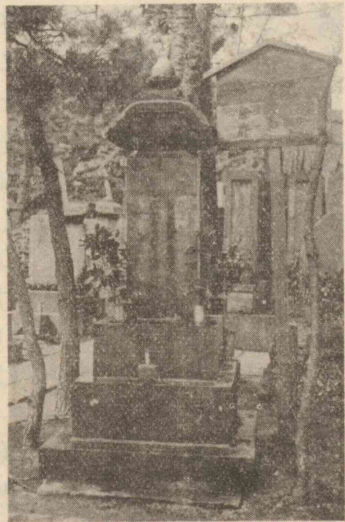
彼の耳には何時か蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼には、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生

じて、一気に紙の上を迂りはじめた。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつづけた。

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに、滾々として何處からか溢れて来る。その凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が、萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

「根かぎり書きつづける。今己が書いてゐる事は、今でなければ書けないかも知れないぞ。」

併し光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。却つて目まぐるしい飛躍のなかに、あらゆるものを溺らせながら、澎湃とし



墓の琴馬

て彼を襲つて来る。彼は遂に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのは、唯不可思議な悦である。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作の嚴かな魂が理解されよう。こゝにこそ「人生」は、あらゆるその残滓を洗つて、まるで新しい鑽石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか……

その間も、茶の間の行燈のまはりでは、姑のお百と嫁のお路とが、向ひ合つて縫物を續けてゐる。太郎はもう寝かせたのであらう。少し離れた所には、尪弱らしい宗伯が、さつきから丸薬をまろめる

のに忙しい。

「お父様はまだ寝ないかねえ。」

やがてお百は、針へ髪の毛の油をつけながら、不服らしく呟いた。

「きつと又お書きもので夢中になつていらつしやるのでせう。」

お路は眼を針から離さずに返事をした。

「困り者だよ。碌なお金にもならないのにさ。」

お百はかう云つて、悴と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをし

て答へない。お路も黙つて針を運びつづけた。蟋蟀はこゝでも、

書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。

—現代小説全集—

一六 夏の夜

清原深養父

元輔の祖
清少納言の曾祖

月の面白かりける夜、あかつきがたによめる 清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを

雲のいづくに月やどるらむ

秋立つ日よめる

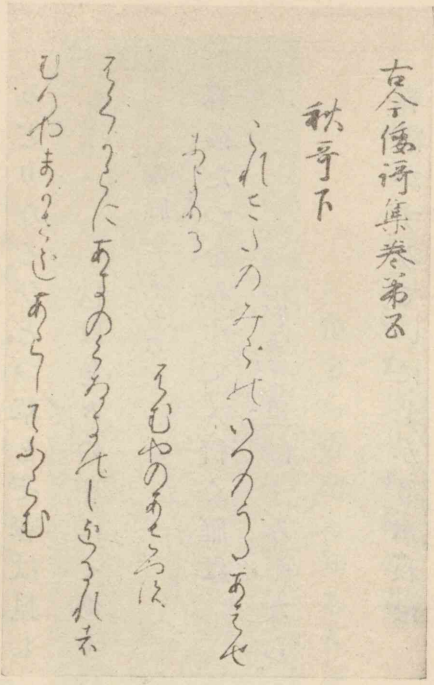
藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

古今倭語集卷第

秋哥下



古今和歌集の一第 (傳之筆)

大江千里

是貞のみこの家の歌合によめる
月みればち々に物こそかなしけれ

藤原敏行

清和帝より宇多
帝に歴仕した
書道の名人

筆蹟

古今倭語集卷第

五

秋哥下

これさたのみ
このいへのう
たあはせによ
める ふむや
のあさやす
ふくからにあき
のくさきのしを
るればむべやま
かぜをあらして
ふらむ

大江千里

参議大江番人の
子
兵部大掾となる

わが身ひとつの秋にはあらねど

題しらず

讀人しらず

みどりなるひとつ草とぞ春は見し

秋は色々の花にぞありける

伊勢

春霞たつをみすて、行く雁は

花なき里にすみやならへる

讀人しらず

春霞かすみていにしかりがねは

今ぞなくなる秋霧の上に

素性法師

みわたせば柳櫻をこきまぜて

都ぞ春の錦なりける

伊勢
伊勢守藤原繼蔭
の女
當代一の女流歌
人

素性
僧正遍昭在俗の
時の子

僧正遍昭

大納言良岑安世

の男

俗名宗貞

花山の元慶寺の

庵主

花山の僧正とも

稱す

紀友則

古今集の撰者の

一人

撰了前に歿す

筆蹟
立春日

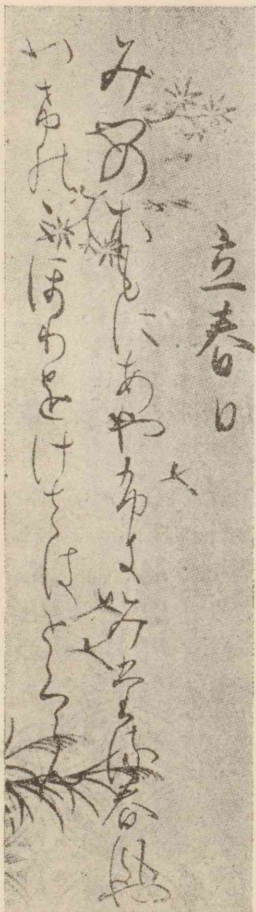
みづのおもにあ
やふきみだる春
風やいけのこほ
りをけさはとく
らん

坂上是則

定成の子

大内記、清水寺

別當等となる



紀友則筆蹟

僧正遍昭

はちすの露をみてよめる
はちす葉のにごりにしまぬ心もて

なにかは露を玉とあざむく

梅の花を折りて人におくりける

君ならで誰にか見せむ梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

紀友則

大和國にまかれりける時に雪の降りける

を見てよめる

坂上是則

あさほらけ有明の月と見るまでに

源宗子
光孝帝の皇子是
忠親王の子

吉野の里にふれるしら雪
冬の歌とてよめる
山里は冬ぞさびしさまさりける
人目も草もかれぬとおもへば

源宗子朝臣

春道列樹
延喜十年文章生
となり二十年壹
岐守となる

年のはてによめる
昨日といひ今日とくらして飛鳥川
流れて早き月日なりけり

春道列樹

古今和歌集

小島鳥水
名は久太
高松の人
著述家
廣重
姓は安藤
江戸時代の浮世
繪師
文政五年歿

一七 廣重と東海道風景

小島鳥水

廣重といへば、すぐ東海道と言ひたくなるほど、密接な関係があるのは、東海道は彼が新しい藝術に素材を供給した土地であるからだ。今日は二三の都市を除けば、詩と畫とローマンズの故郷と

して、吾人に淡い哀愁を與ふるに過ぎないほど、東海道は吾人の生活とは遠いものとなつてゐる。



安藤廣重 (三代豊國筆)

久しく戰國時代の疲弊をうけてゐた東海道は、織田・豊臣時代に、道路も修繕され、橋梁も改築されて、舊觀に修復したが、徳川氏の治世となつて、慶長九年には、諸國の海道一里毎に、塚を築き、榎を植ゑて、所謂一里塚を作り、又海道の兩側には並木を設け

て、風致を添へ、旅人の休憩に便にした。

廣重の「東海道風景圖會」日本橋の畫に、柳下亭種員が「名城と名山晴れて江戸の春」の句を題してゐるが、この江戸日本橋が全國道程の基點と定められた。その日本橋を發足點として京都に向ひ、大

柳下亭種員
江戸の人
草雙紙作者
安政五年歿

抵二三里ぐらゐに川や海に沿ひ、又は山に抱かれて宿驛が五十三ある。この五十三次を定めたのは、鬼門關外莫道遠モトトシト、五十三驛是皇



日本橋 (内次三五道海東) 橋本日 (筆重廣)

州といふ山谷の詩に據つたものであるらしい。これらの宿驛も、道路も、寛永年間に諸侯の江戸参勤交替の制が定められて、海道に大名行列が、嚴めしく通行するやうになつて整頓されたのである。

東海道五十三次の往來は約十日、木曾街道六十九次は約十二三日の路程であつた。ただ諸藩割據の餘弊は、故らに行路を阻むやうな、山間海岸諸所に不便な難所が、横たはつてをり、橋梁を設けぬ川などもあり、要所

には關所をしつらへて、嚴重に行人を吟味した。かういふ川は大
雨には、川留の混雜となり、晴れにも旅人は人夫の肩に乗つて渡る
外なかつた。若し關所を避けて間道
を行けば、關所破りの罪人として、磔刑
に處せられた。かうした旅の不便も
今日から想像すれば、茨に咲いた花の
やうな、一種の美しさを感ぜられぬで
もない。

旅人は慶長の初には、宿舍の設けがあつても、古代の風を存して、米や糶を携へて往來し、旅舎は湯を給したり、米を炊ぐ薪を給するのみであつて、木賃の稱呼はこれからはじまつたのである。又夜具蒲團は調へて貸す宿舍もあつたが、多く自分



金谷 (内次三五道海東) 谷金 (筆重廣)

で携へて行つたことは、今日の支那内地の旅行と異ならぬのであつた。江戸時代になつては旅舎には風呂の設備もあつて、旅客は

浴衣姿にくつろぎ、按摩に肩を揉ませる楽しみもあつた。

海道には葎箆張の茶屋があつて、名物を鬻いだ。小田原の外郎安倍川の安倍川餅、宇都谷峠の十團子、鞠子の宿の薯蕷汁、鳴海の有松絞、桑名の焼蛤、草津の姥が餅、天津の天津繪は最も有名であつた。

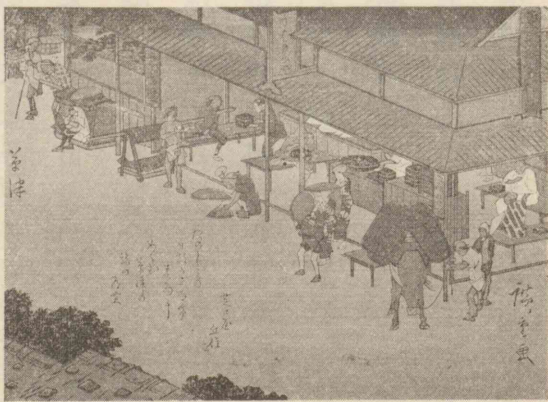
と共に、各地、各階級の風俗を眼のあたりに見るやうに寫生したものに、廣重の繪畫と一九の道中膝栗毛とがあつた。これ等の作品



府中 (内次三五道海東) (筆重廣)

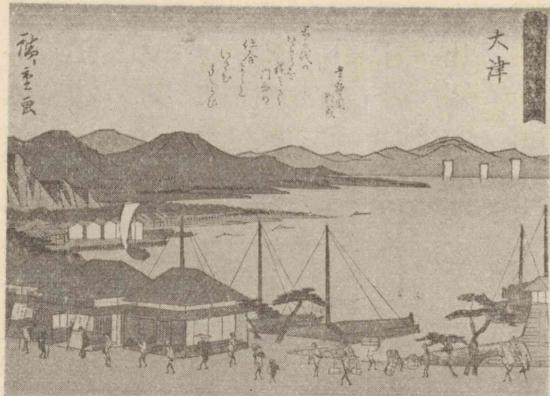
が、更に東海道に對する民衆一般の興味を喚起したことは言ふまでもない。

一九は、江戸時代生活の悦樂を主として書いてゐるが、廣重は寧ろ江戸時代の享樂的な生活の反面に多く眼を向けてゐる。それで神社・佛院の莊麗典雅や、驛路の繁華、旅舎の饗宴等にはうしろを見せて、黄昏に橋上を急ぐ旅人、月影のほのめく並木の間の疲れた金比羅詣、雲助どもの焚火してゐる村外れ、雪にふりこめられてゐる海道の人家と、合羽の雪をうち拂ひ、傘をつぼめて行く旅人の姿などを寫してゐる。その人物も旅僧・虚無僧・雲助・飛脚・按摩・旅商・田舎道者比



草津 (内次三五道海東) (筆重廣)

丘尼・普女・六部・金比羅詣・脱け参りの小僧・賣藥商・鹿島の事觸れなどが多く見える。さうして、一九は畢竟機智から来る洒落や、ふざけ



大津 (東海道三十五次の内) (廣重筆)

である。

に重きを置いてゐるが、廣重は寂しきを持つた東海道の自然に對する熱愛と感激を表してゐる。一九の膝栗毛が今日では藝術上の興味・價値を離れて、風俗史料・方言資料として珍重されるに至つたのに、廣重の東海道の作畫には、我々も、秋風が枝豆の莢をさらさらと鳴らして吹くやうな荒涼たる一種の哀音を聴取することが出来るの

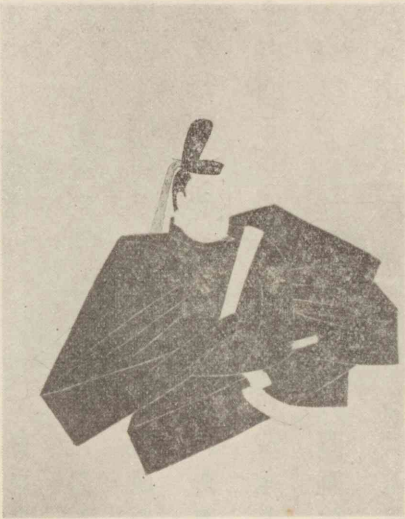
—浮世繪と風景畫—

太政の入道
平清盛

太政の入道はかやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黒絲緘の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。「貞能」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋緘の鎧着て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、このこといかゞ思ふぞ。保元に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一宮の御事は故刑部卿の殿の養君にいたしましたし、かば旁見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて

先をかけたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月信頼、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしにも、入道隨身を捨て、兇徒を追落し、經宗、惟方をめし縛めしに至るまで、君の御爲に、すでに命を失はんとすること、たびたびに及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに、君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏するものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵とな



平 清 盛

つて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面のものどもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。着脊長取出せ。とこそ宣ひけれ。

主馬の判官盛國、急ぎ小松殿へ馳参つて、世は早かう候。と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼、はや成親の卿の首の刎ねられたんな。と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御着脊長を召され候ふ上は、侍どもも皆うち立つて、ただ今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせうとは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせんとこそ議せられ

候ひつれ」と申しければ、大臣、何によつてたゞ今さることのおはす
べきとは思はれけれども、けさの禪門の氣色、さるもの狂ほしきこ
ともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはした
る。



門前にて車より下り、門の内へさし入
りて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門
の卿相雲客數十人、各いろくの直垂に
盛 思ひ思ひの鎧着て、中門の廊に二行に着
せられたり。その外諸國の受領、衛府諸
司などは縁にゐこぼれ、庭にもひしと並
みゐたり。旗竿などを引きそばめ、引きそばめ、馬の腹帯を固め、胃
の緒を締め、ただ今皆うち立たんずる氣色どもなるに、小松殿烏帽
子直垂に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、殊の外に

ぞ見えられける。

五戒
佛敎て不殺生・
不偷盜・不邪淫・
不妄語・不飲酒
の五つの戒を云
ふ

五常
儒敎ていふ仁・
義・禮・智・信

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするさまにふる
まふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、さすが子なが
らも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀
を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着て向はんこと、さすが
面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹巻の上に
素絹の衣をあわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れ
て見えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひけ
る。大臣は舍弟宗盛の卿の座上に着き給ふ。入道宣ひ出さるゝ
こともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

稍、あつて入道宣ひけるは、あの成親の卿が謀叛はことの數にも
候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めんほ
ど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御

幸をなし参らせんと思ふはいかに」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらくとぞ泣かれける。入道、さていかにやいかに」とあきれ給へば、稍あつて大臣涙をおさへて、「この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候なり。また御有様を見参らせ候に、更に現とも覺え候はず。さすが我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根尊の御末、朝の政を掌らせ給ひしより、この方、太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふこと、禮儀を背くにあらざや。就中出家の御身なり。法衣を脱捨てて、忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しまさんこと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんぞ。かたがた恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これな

普天の下

普天之下、莫非王土（詩經）

瀬川の水

支那堯の代の隠士許由の故事

首陽山に

伯夷・叔齊の故事

り。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下、王地にあらざといふことなし。さればかの瀬川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命の背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかに況や、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ等の莫大の御恩を思し、召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け参らせ給はんこと、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんぞ。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、事すでに露はれ候ひぬ。その上仰せあはせらるゝ成親の卿を

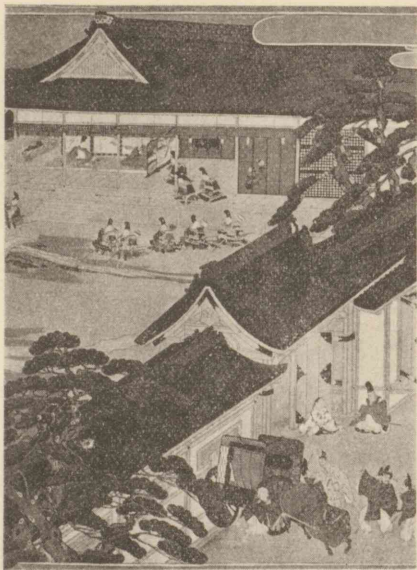
召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて君の御爲には愈、奉公の忠勤をつくし、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思し召し直すことなどか候はざるべき。

これは尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し参らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣の大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずるに、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に参り籠り候べし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の嶺よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛まし

千顆萬顆の玉
和漢朗詠集の菅
三品の「瑩」日
瑩の風高低千顆
萬顆之玉、染枝
染浪、表裏一入
再入之紅」の句
よりとる

きかな。不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷まれり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、ただ重盛が首を召され候へ。その故は、院

重盛諫言
參の御供をも仕るべからず、
また院中をも守護し参らす
べからず。



(筆翠文原神)

富貴といひ、榮華といひ、朝
恩と申し、重職といひ、旁極め
させ給ひぬれば、御運の盡き
んこと難かるべきにあらず。

富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木は、その根必ず傷むと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候べき。ただ末代に生を享けて、かゝる憂目に逢ひ候重盛が果

報のほどこそ拙う候へ。ただ今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易いほどの御事にこそ候はんずらめ。これを各、聞き給へ」とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめさめと泣き給へば、その座に並みぬ給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。

入道頼みきつたる内府のかやうに宣へば、世にも力なげにて、いやいやそれまでのことは思ひも寄り候はず。悪黨どもの申すことに君のつかせ給ひて、いかなるひがごとなどもや出て来んずらんと思ふばかりでこそ候へ。大臣たとひいかなるひがごと出て来候へばとて、君をば何とかし参らせ給ふべき」とて、つい立つて中門に出て、侍どもに宣ひけるは、「ただ今これにて申しつることどもをば、汝等はよく承らずや。けさよりこれに候ひて、かやうのことどもを申ししづめんとは存じつれども、餘りにひたさわぎに見え

つる間、まづ歸りつるなり。院参の御供に於ては、重盛が頭の刎ねられたらんを見て仕れ。されば人参れ」とて、小松殿へぞ歸られける。

その後、大臣、主馬の判官盛國を召して、重盛こそけさより別して天下の大事を聞き出したんなれ。われをわれと思はんずるものどもは、物の具して急ぎ参れと催せ」と宣へば、馳せまはつて披露す。おぼろげにては騒ぎ給はぬ人のかやうの披露のあるは、まことに別の仔細のあるにこそとて、われもわれもと馳せ参る。都の内外にあふれるたる兵ども、あるは鎧着て未だ冑を着ぬもあり。あるは矢負うて未だ弓を持たぬもあり。片鎧ふむやふまずにて、騒いで馳せ参る。

小松殿に騒ぐことありと聞えしかば、西八條に數千騎ありける兵ども、入道にはかうとも申しも入れず、さやめきつれて、みな小松

殿へぞ馳せたりける。弓箭にたづさはるほどのものは一人も残らず。筑後守貞能がただ一人候ひけるを、御前へ召して、内府は何と思ひて、これ等をば皆、かやうに呼び取るやらん。けさこれにていひつるやうに、淨海が許へ討手などもや向けんずらんと宣へば、貞能涙をはらくと流して、人も人にこそよらせ給ひ候へ。いかでかただ今さる御事候べき。けさこれにて申させ給ひつる御事どもをばはや皆御後悔ぞ候らんと申しければ、入道、内府に中たがうては悪しかりなんとや思はれけん、法皇迎へ参らせんと思はれける心も和ぎ、急ぎ腹巻ぬぎ置き、素絹の衣に袈裟うちかけて、いし心にも起らぬ念誦してこそおはしけれ。

一九 塔 影

河 井 醉 茗

墨繩たゞす番匠が、



名は又平
堺市の人
詩人

河井 醉茗

掌の上につくられて、
朝狭霧の晴れゆけば、
寶珠を天に捧げ持ち、
岸に聳ゆる五層塔。

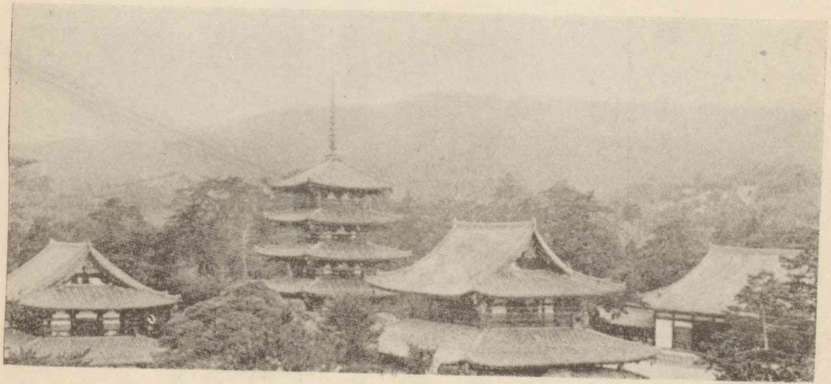
藏めし經も蠹みて、
供養忘れし澆季の世の、
雲をさへぎる勾欄に、
清き匏の痕見れば、
塵に氣韻も残るかな。

秋は露盤に露うけて、
扉は神祕に閉されぬ。

四天の神に守護られて、
金輪際に根を埋め、
夜は北斗をうかゞへり。

家に住まざる山鳩の
巢くふに處得たればか、
虚空杳かに翔れども、
畫棟の朱の古びたる
浮圖を慕うて歸るらん。

落暉は西に傾いて、
五重の屋根の歴然に、
重なりうつる草の上、



月は廂に浮かび出て、
九輪の影は水に在り。



雲の崖より吹き落ちて、
風湖を拭ひ去る、
波の面に刻まれし、
アートの花に咲きちらふ、
時の力の遠きかな。

アート
藝術

その世に媚びし歌反古は、
曆の嵐に破れたり。
生命の岸を下に見て、
天に呼吸する塔の
高き姿を水に見よ。

— 醉茗詩集 —

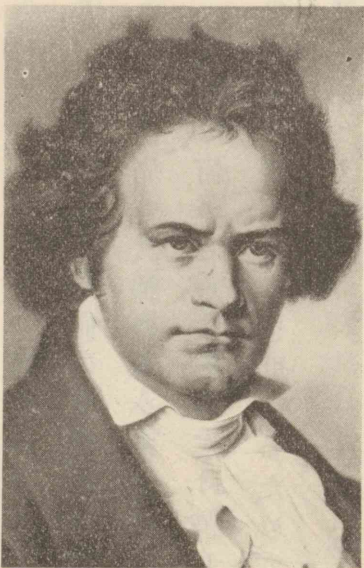
二〇 ベートーヴェンの一生 中 澤 臨 川



中 沢 臨 川
名は重雄
臨川は號
長野縣の人
文學者
大正九年歿（年
四十三）

「悲しみを經ての喜び」——これがベートーヴェンの一生の格言であつた。彼の一生は決して野心家を満足させるやうな教訓をも逸話をも有してゐない。それは、苦しんでゐるもののために、そして、眞に苦しむことの出来る力のあるもののために、「聖なる悲しみの甘露」を恵むのである。

記憶せよ。——特に若い人々のためにいふ。——この世は薔薇の



ンエヴートーベ

いではゐられない場合がある。記憶せよ。こんな場合に、眞の偉人が汝を助けに来る。ベートーヴェンが汝に役立つ。

凡庸な利害得失の世俗戦に倦れた時、ベートーヴェンの持つてゐるやうな信念と意志の世界に暫くても身を置くことはどれくらゐ我等にとつて強味であるかよ。偉人の身邊には、言葉にいひあらはすことの出来ない勇氣の感染力がある。

我等は運と偶然によつて物質界に成功した著名な人達を忘れよう。たゞ心の偉大であつたものだけがヒーローの名に値する。人間の偉大さを計る尺度は人格である。我等は成功を説くまい。要は偉大であることであつて、偉大に見えることではない。偉人の生涯は長い犠牲に外ならない。悲惨な運命が、彼等の肉と靈の苦しみの鐵砧の上で、彼等の精神を鍛へ上げた。彼等は朝に夕に苦痛と試練のパンを食べた。

彼等は何のためにそれだけ苦しんだのであらう。それは、後の世のより強い仲間を助けるためであり、また力と恵みを與へるためであつた。

ボン
ドイツの西部ラ
イン河に沿ふ都
會

ベートーヴェンは、一七七〇年ボンに生まれた。彼の祖父も父も、その土地の王室附の賤しい音楽師であつた。彼の母はやはり貧しいコックの娘であつたが、その夫の酒癖の爲に、一生を一つの

楽しみも知らないやうにして送つた。

ベートーヴェンは四歳の時からもう音楽を習はせられた。そして残酷な父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歳の時から或劇場のオーケストラに出て、一家の生計を助けねばならなかつた。

彼は十八歳の時、眞實たよりにしてゐたその母を失つた。彼はその以前から一家の主人役として、二人の弟を育てねばならなかつた。彼の父は酒のために全く仕方のないものになりおほせてゐたので、その受ける養老金さへ、直接子供の手に渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦い經驗は、一生消しがたい深い印象を若い音楽家の胸に與へた。

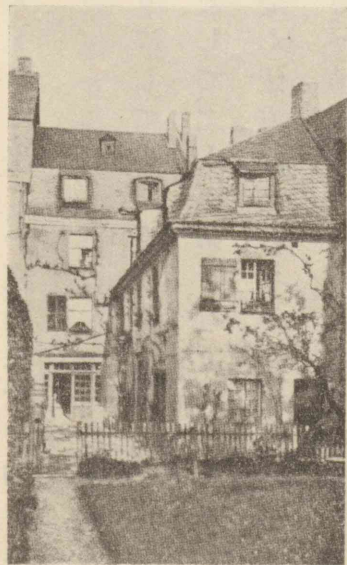
一七九二年、彼はウインナへ去つた。傷ましい生活の中にも、流石に若く美しい夢をはぐくんだ靜かなライン川の岸邊を見棄て

ウインナ
オーストリアの
首府

ライン川
アルプス山系に
發し北海に注ぐ
河

ることが、どんなに惜まれたことであらう。「我が故郷！そこは私
が始めて日の光を見たところ、今も昔のやうに美しいところ」とい
つて、彼は一生その故郷を慕った。

その頃から彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一七九六年、彼は
自分の手帳にかう書きつけ
た。「勇氣。私の身體の虚弱
なのにもかゝはらず、私の天
才は前途に輝くであらう……
二十五歳！この年齢に今私
は達した……この年齢は人
間がその全部を發揮せねばならぬ時だ。」彼はまたかういつた。
「私の藝術は貧しいものを救ふより外の目的に捧げられてはなら
ぬ。」



家生のンーユヴトーベ

ちやうど、その頃から、また最大の不幸が彼の身體に一生の宿を
取った。彼は聾になり初めた。世に音楽家はその耳を失ふこと
ほど悲しむべきことがあらうか。彼は堪へることの出来ないほ
どの苦痛を忍んで、幾年かの間それを人に祕してゐた。しかし



自畫像

よいよ回復の見込の立たなくなつた
時、劇しい絶望を以て、これを友達に打
明けなければならなかつた。「親愛な
る友よ。お前のベートーヴェンほど
不幸なものはない。私の一番貴い部
分である聽感が、今私を見捨てつゝある……私の愛する凡てのも
の、私に親愛なあらゆるものを捨ててまで、このみじめな邪慳な世
の中に生き永らへなければならぬ私の一生は、どんなに悲惨で
あらう。私はしばしば、この身を呪つた……私はブルタークから

ブルターク
古代ギリシヤの

哲學者・傳記作者
「英雄傳」の著者

忍従の徳を教はつた。出来ることなら、私の運命が私に與へたところに堪へ忍ぼうと思ふ。しかし、この廣い天が下にも、私ほど不幸な生き物があるだらうかと、つらく考へ悩むことがある。忍従よ。悲しい隠れ場所よ、たつた一つの私の隠れ場所よ。

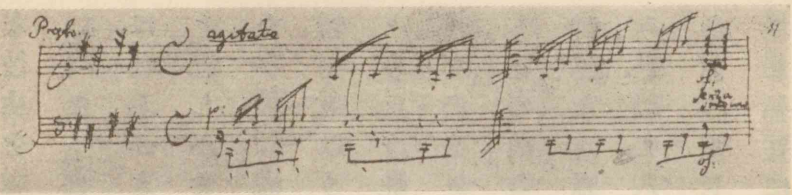
一八〇六年、彼はフランスウィック女史と婚約をした。しかるに、この平和もまた永く續かなかつた。彼等は互に相愛しながらも、自然に遠ざかつてしまつた。

それからはずつと孤獨の生活が續いた。しかも、それは洗ふやうな赤貧と不遇の生涯であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。「私は殆ど乞食のやうだ」と、彼はいつてゐた。或有名な曲を出した時などには、僅か七冊しか賣れなかつた。

愛も野心も去つた後、彼に残されたものはたゞ力だけであつた。その力の喜びと、これを表現する必要とが彼を占領した。一八一

バツカス
ギリシヤ神話の
酒の神

ナポレオン
フランス皇帝
(西紀一七六九—一八
三三)



譜樂の筆自ンエヴートーベ

二年、彼を見た一人は、「どんな皇帝でも、曾て彼のやうに自分の力を意識したものはない」といつた。當時、或者は、彼の曲をさして、「醉漢の音楽だ」といつた。確かに醉漢の音楽だ。しかし、彼は自らかういつた。「俺は人類のために喜びの神酒の口を開けてやるバツカスだ。俺は精神の聖狂を人間に與へる醉漢だ。」

彼はナポレオンを見てかういつた。「俺が音楽の術を知つてゐるやうに戦術を知つてゐれば、彼に教へてやるものを」と。彼の容貌はナポレオンによく似てゐた、殊にその意志を現はす引締まつた口元が。この未來の人道を目的としてその一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として靜か

な往生を遂げた。彼は息を引取る前に、自分の一生を顧みてかういつた。「喜劇の終」。その日は殊に嵐が劇しかつた、二月の寒い空にはふぶきがして。

「悲しみを経ての喜び、彼ぐらゐ聖い喜びに憧れたものはなかつた。彼は悲惨な生活のどん底から、未來の人類のために、「喜悅」の福音を歌はうと思つた。彼は幾度かためらひ、幾度か失敗した後で、とうとう晩年にその希望を實現した。「第九旋律曲」といふのがそれである。

その曲の中途に、オーケストラが急に停まつたかと思ふと、深い神祕な沈黙がやゝ暫く続く。そして、「喜悅」の神が優しい静かな歩みを以て人の心の悲しみを見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがて狂熱の形に變る。そして、嵐の中のリヤ王のやうな暴狂に移つた後で、それがまた静かな、宗教的法悅の境に入り、

リヤ王
シエエークスビ
ヤ作の戯曲中の
人物

最後は聖愛の無我郷で曲が結ばれる。

オーステルリッ
ツ
當時のオースト
リヤ、ハガソリ
ヤにあり
ナポレオンが露
奥聯合軍を破つ
た地

何がかやうな勝利と並ぶことが出来るか。オーステルリッツの戦勝も、この永世の凱歌の前には、はかない一場の夢ではないか。偉大な生の熱愛者。彼の口からは常に喜悅の聲が洩れた。不幸が彼の命を奪はうとしたその日でさへ、「お、かうも美しい人生よ。」と。また、「私は、私の生涯を千たびでも繰返したいと思ふ。」と。苦しむものよ、苦しむ力のあるものよ。汝のためには、この偉人の一生ほど好い慰安と刺戟はない。彼は自分が悲惨の頂點にゐる時でさへ、彼の實例が後世の苦しむもののために助となることを望んだ。そして、かういつた。「憐むべき忍苦者は——己と同じやうな一人の人間——あらゆる自然の障害にもかゝはらず、男らしい男になるために、その全力を盡した一人の人間を、こゝに見出して慰安を感ずるであらう。」と。

—嵐の前—

綱島梁川
名は第一郎
岡山縣の人
倫理學者
明治四十年歿
(年三十五)

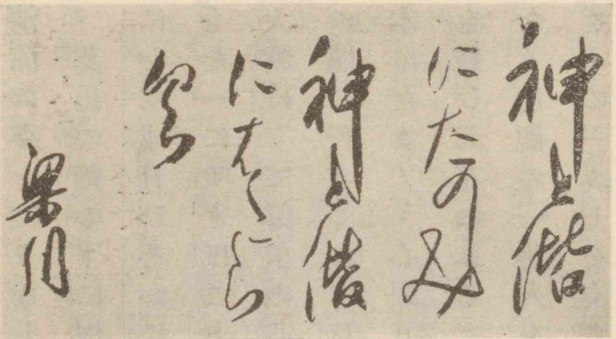
二一 小草の花

綱島梁川

鐘の音霞む
花の雲鐘は上野
か浅草か 芭蕉

鐘の音霞む花の雲に、ひねもす人の山分けまどひて、さて歸りて、わが家の一本櫻に春のまことのあはれを知るならひぞかし。ことし、秋は初めの垣根の薺花^{なごはな}、朝な夕の露にすゞしきころ、庭の片隅に打棄てられたる古鉢の、去年の生命一粒を辛くも宿したるが、いつの間に萌え出でけん、一尺ばかりなる蔓莖の、やうやう力なげに青空にあこがれそめて、青黄色したる薄葉二つ三つ着きたり。もとより心にとゞめでありけるが、ある朝ふと起き出で見れば、さばかりわびしかりし蔓莖に、白き大輪の花ただ一つ、あはれ美しうも、け高うも咲きつるかな。生命の通路いとくるしきこの蔓莖にして、天つ日影の恵いと薄きこの病葉^{わづらば}にして、思ひきや、白一點、精采奕々、露に輝き、光を含み、靈しき天地の心を咲きいでなんとは。

筆蹟
神と僧にたのしみ
神と僧にはたらく
梁川



をりからを垣根に咲盛れる花のいろく、皆けおされたる心地して、われはこの花一つに心動きぬ。

これもことし、秋の暮れつかた、掌ばかりの浅き鉢に、星月夜とかやいふ野菊數株まばらに植込みたるを、さるかたよりおくりばらにしぬ。黄なる小輪の花七つ八つ、頭そろ川へて何事をか打ちさゝやくさまの、いとし筆をらし。鉢に盛れる土には、おのづからなる野らんなどのやうに蒼苔ところく、に生えたるが、なほ視れば、そこにもさゝやかなる草花の一むら、自然の一郭を作りなしたり。われはこの一撮土に生ふるはかなき草花に打ちむかふをりをり、秋の花野の風情、おのづから千里の

外に動くを覺えたり。さてまた夜は、そのほかのなるかをりに、屢、清涼の夢を織りなしぬ。

萬馬の蹄の下に泥海などのやうに踏みあらされたる曠野の中にして、或日ひそかに大いなる自然の力を縁深う萌え出でて、色香もたへに咲きほこりたる一本小草の花を見出でたる、誰かはその大膽にして歸依の心ひとすぢに高き姿を慕はざる。あるは山路の闇に行きくれて、草枕わびしき旅人の、何やらゆかしき葦草の一本に、たま〜心躍りては熱き涙も下りぬべし。ソロモンの榮華を競ひし花のふるごとはさらにもいはず、この世を夢と悟りすてたる達觀の一俳人をして、何の木の花とは知らず句ひかなと、優しき心の一ふしを奏ていでしめたる花の心の今更問はまほしく、さては西の國なる高調の一詩人をして、路のべのいともあやしき草花だに、涙に餘る深き思を湛ふと詠み出でしめたる言の葉ぞ想ひ

何やらゆかし

山路来て何やら

ゆかし葦草

芭蕉

ソロモン

西紀前十世紀の

ヘブライの王

何の木

芭蕉の句

路のべの

英國の詩人ウオ

ヅウォースの

詩句

出でらるる。

山高きが故に貴からず、花驕れるが故に妙ならず、籬落に着き、流水に漂ふ名もなき小草にだに、われらが拾ふべき力と榮はなと詩と恵とはいとさはにあるをや。

—梁川文集—

二二 百蟲譜

横井也 有

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、この物の事更にも謗り難し。蟬はただ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やや日ざかりに鳴きさかる頃

横井也有

名古屋藩の重臣

俳人

天明三年歿(年

八十二)

莊周が夢

「莊子」齊物篇に

ある故事

古今の序

古今和歌集の序

文

古池に

芭蕉の句「古池

や蛙飛び込む水

の音」

おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の隄を崩すべからず。

筆蹟

蟲の音は掃れて
遠し寺の庭
也有



有也筆蹟

歐陽氏に

歐陽修の「憎_ム蒼
蠅_ヲ賦」をさす

長嘯子

木下長嘯子の

「憐_ム紙魚_ヲ詞」を
さす

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に噛まるゝ、蚤はたまゝにして、猿の手にさぐらるゝ、鼠は逃るゝこと難かるべし。蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家もちたれども、行く先々をおひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蛇・蚯蚓の足なくても歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。ただ原吉原を駕にのりて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音に似たるを以て名によばる。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附きたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯らし、人にうとまる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、始めてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りたるは寂しき

原

静岡縣駿東郡

吉原

静岡縣富士郡

かたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊遣火焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。
—うづら衣—

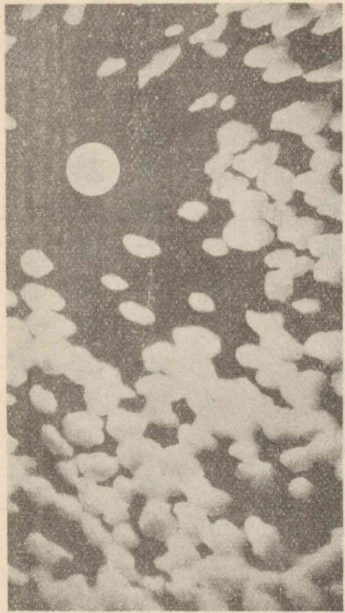
二三 月雪花の美観

芳賀 矢一



福井縣の人

文學博士
東京帝國大學名譽教授
昭和二年歿（年六十一）



（筆風草野長）

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈てはない。日は赫々として仰いで見る事も出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば、群陰影皆を伏して、大小の有象無象は悉く照破せられるが、月輪は萬象を一

につゝんで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない清涼の光である。皎潔無垢、崇美と稱ふべき優しい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じず。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人でも、月前の歌舞には終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、限なく世界を照す月光の、人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。

打向ふ

荷田蒼生子の作

打向ふ月は一つの影ながら
浮かぶは千々の思なりけり
である。

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光

に向つて訴へられた。之を嗟歎し、之を吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち満ちて居る。天文學者はいふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である」と。この冷たい光が、古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。

花ならば咲かぬ梢もまじらまし

なべて雪降るみ吉野の山

といふやうに、眼に入る物、悉くその色に包まれてしまふ。

三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。

の美観は、一切の人間の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在る

花ならば
新古今集(僧仙
覺)

三千世界
唐の詩人白樂天
の句

の感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を残して、山といはず、野といはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩ぜしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々の眺はもとより美しいに相違ない、花の散つた後の新綠色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉も無い冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中蓮の花の咲いてゐる極

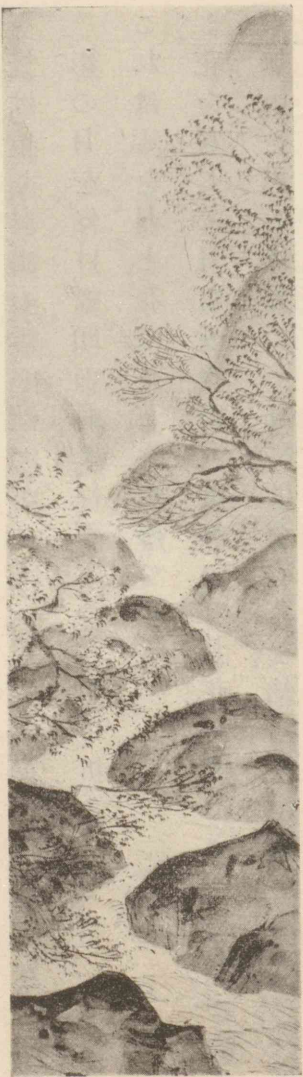


(筆水春田永)

雪

樂淨土は、決して我等の世界程楽しいものではなからう。雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへ有つて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理は無いが、山の花、野の花、いづれも月雪と同じ様に、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感じずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その

清淨を貴ぶが、花はその艷麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ花やか花々し華美華麗華奢等の語は、みな花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。



(筆門多内山) 水流花櫻

余はたと「花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。月雪花三つの眺は、各その特長がある。いづれを前、いづれを後といふことが出来ぬ。

山櫻花の下風吹きにけり

花をし
としふればよは
ひは老いぬしか
はあれど花をし
見れば物思ひも
なし 古今集
(藤原良房)
山櫻
新古今集(康資
王の母)

冬ながら
古今集（清原深
養父）

笠は重し
謡曲葛城の語

木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し吳山の雪。鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無

影の月を傾け、檐頭の月には不香の花を手折る。

これは雪を月と花にたとへたのである。

花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪を賞てぬ人も無い。思へ、世界の一部には全く花を知らない國もある。一年中氷雪に鎖されてある極北の國では、氷は即ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を楽しましめるものも無い。又之に反して全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱

世々を経て
伊藤仁齋の作

帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見た事がない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は、美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人の、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。月雪花の眺は、古人の歴史が加つて一層の感興が増す。世々を経てながめし人の數にまた

我をもゆるせ秋の夜の月

月は古來の歴史を照す鏡である。

年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。

人生の感は花を見て益、繁く、雪を見て愈、多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

—月雪花—

森 鷗 外

鷗外は號
醫學博士
文學博士
大正十一年歿
(年六十二)
白河樂翁
松平定信

二四 高瀬船

森 鷗 外

いつの頃であつたか、多分江戸で白河樂翁公が政柄を執つてゐた、寛政の頃でもあつただらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない珍しい罪人が、高瀬船に載せられた。それは名を喜助といつて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、船にも只一人で乗つた。護送を命ぜられて、一しよに船に乗込んだ同心羽田庄兵衛は、只喜助が弟殺の罪人だといふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間に、この瘦肉の色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。然も

それが、罪人の間に往々見受けるやうな、温順を装つて權勢に媚びる態度ではない。庄兵衛は不思議に思つた。そして船に乗つて

高瀬船から、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の舉動にこまかい注意をしてゐた。



葛飾北齋筆

高瀬船

庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにゐる。そして「不思議だ」と、心の内で繰返してゐる。それは、喜助の顔がいかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼ねがなかつたら、口笛を吹きはじめるとか、鼻唄を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまでこの高瀬船の宰領をした

ことは、幾度か知れない。然し載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目もあてられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それにこの男はどうしたのだらう。遊山船にでも乗つたやうな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしやその弟が悪い奴で、それはどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情としてよい心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人の情といふものが全く缺けて居る程の世にも稀な悪人であらうか。どうもさうは思はれない。氣でも狂つて居るのではあるまいか。いや、それにしては何一つ條理の合はぬ言語や舉動がない。この男はどうしたのだらう。庄兵衛には喜助の態度が考へれば考へる程わからなくなるのである。

しばらくして庄兵衛は、こらへ切れなくなつて呼び掛けた。

「喜助。お前何を思つてゐるのか。」

「はい」といつてあたりを見廻した喜助は、何事をお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衛の氣色を窺つた。庄兵衛は、自分が突然尋ねた動機を明らかにして、役目を離れた應對を求めるといひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう言つた。

「いや別にわけがあつて聞いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ行く心持が聞いて見たかつたのだ。己は、これまでこの船で大勢の人を島へ送つた。それは随分いろ／＼の身の上の人だつたが、どれも／＼も島へ行くことを悲しがつて、見送に来て一緒に船に乗る親類のものと、夜どほし泣くに極つて居た。それにお前の様子を見れば、どうも島へ行くのを苦しめてはゐないやうだ。一體お前はどう思つて居るのだい。」喜助はにつこり笑つた。「御親切に仰つて下さつて有難うございます。なる程島へ

行くといふことは、外の人には悲しい事でございます。しかし、それは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私のいたして参つたやうなくなるしみは、どこへ参つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいませ。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございますまい。私はこれまでどこといつて、自分の居てよい所といふものがございませんでした。今度お上で『島にゐろ』と仰つて下さいませ。その『ゐろ』と仰る所に落付いてゐることが出来ますのが、先づ何より有難いことでございます。それから今度島へお遣り下さるにつきまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。かういひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せつけられるものには、鳥目二百文を遣はすと云ふのは、當時の掟であつた。

喜助は語を續いだ。「お恥かしいことを申し上げなくてはなりません。私は今日迄二百文といふお足を、かうして懐に入れて持つてゐたことがございませぬ。どこかで仕事に取りつきたいと思つて、仕事を探ねて歩きました。それが見つかかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物が買つて食べられる時は、私の工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又後を借りたのでございます。それがお牢に這入つてからは、仕事をせすに食べさせて戴きます。私はそればかりでもお上に對してすまない事をいたして居るやうでなりません。それにお牢を出る時に、この二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、この二百文は、私が使はず持つてゐることが出来ませぬ。お足を自分の物にして持つて居るとい

ふ事は、私に取つては、これが始めてでございます。島へ行つて見ますまでは、どんな仕事が出来るか分かりませんが、私はこの二百文を、島でする仕事の元手にしようと思つてをります。」かう言つて喜助は口を噤んだ。

庄兵衛は、「うん。さうかい。」とは言つたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これもしばらく何もいふ事が出来ずに、考へ込んで黙つて居た。

庄兵衛は彼是初老に手の届く年になつてゐて、もう四人の子がある。それに老母があるので、家内七人ぐらしてある。平生人には吝嗇といはれる程の儉約な生活をしてゐて、衣服は自分が役目のために着るものの外、寝巻しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻をよい身代の商人の家から迎へた。そこで妻は、夫の貰ふ扶持米でくらしを立てて行かうとする善意はあるが、裕か

な家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が満足する程、手許を引締めてくらしして行くことが出来ない。動もすれば、月末になつて勘定が足りなくなる。すると、妻が内證で里から金を持つて來て、帳尻をあはせる。それは夫が借財といふものを、毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふ事は、所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は五節供だといつては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと云つては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、くらしの穴を填めて貰つたのに氣がついては、よい顔はしない。格別平和を破ることのない羽田の家に、折々波風のおこるのは、これが原因である。

庄兵衛は今喜助の話聞いて、喜助の身の上をわが身の上にしき比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して失くしてしまふと言つた。いかにも哀れな氣の毒な

境涯である。併し一轉してわが身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して、くらしてゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十路盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄だに、こちらにはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文でも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。その心持は、こちらから察して遣ることが出来る。しかし、いかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。庄兵衛はこゝに、彼と我との間に大なる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行くくらしは、まづ一、手一ぱいのくらしである。然るに、自分はそれに満足を覺えたことはない。かうしてくらししてゐて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、

大病にでもなつたらどうしようといふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴填めをしたことなどがわかると、この疑懼が、意識の闕の上に頭を擡げて來るのである。

一體この懸隔は、どうして生じて來るのだらう。只表面だけを見て、喜助には身に繫累がないのに、自分にはあるからだと思つてしまへば、それまでである。しかし、それは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうもない。この根柢は、もつと深いところにあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、この病がなかつたらと思ふ。その日その日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又その蓄がも

つと多かつたらと思ふ。かくの如くに、先から先へと考へて見れば、人はどこまで行つて踏みとままるものやらわからない。それを今日の前で、踏みとままつて見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は氣がついた。

庄兵衛は、今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。この時、庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から、後光がさして居るやうに思つた。

——鷗外全集——

帝國新國文卷七終

帝國新國文卷七

昭和七年十一月五日印刷
昭和八年八月二日訂正發行
昭和八年八月五日訂正發行

定價 金 六 拾 錢

編者 藤村 作

發行者 株式會社 帝國書院
東京市神田區西神田一丁目三番地

代表者 增田啓策
東京市京橋區銀座四二ノ三

印刷者 高橋 郁
東京市神田區西神田一丁目三番地

發行所 株式會社 帝國書院
振替口座東京七〇二

關西販賣所 大阪市東區橫堀四ノ三
 三宅莊藏書店

振替口座大阪六九

不許	複製
----	----

海國圖志卷之五

海國圖志卷之五
南洋諸島

南洋諸島
一、東印度
二、南印度
三、西印度
四、北印度
五、東非洲
六、南非洲
七、西非洲
八、北非洲
九、東歐洲
十、南歐洲
十一、西歐洲
十二、北歐洲
十三、東亞
十四、南亞
十五、西亞
十六、北亞
十七、東洋
十八、南洋
十九、北洋
二十、西洋

文德全人編

